

宮城県多賀城跡調査研究所年報2003

# 多賀城跡

宮城県多賀城跡調査研究所

## 序 文

当研究所は、特別史跡多賀城跡の発掘調査事業に加え、昭和45年から調査成果に基づいた環境整備事業を継続的に実施している。発掘調査事業の目的は、多賀城の歴史的意義を解明することであり、環境整備事業の目的は、発掘調査成果をもとに、多賀城跡を史跡公園として保存、活用していくことにある。

これらの理念に基づき、発掘調査事業では、平成11年度に政府一南門間を重点整備地区として位置付けた第7次5カ年計画を策定し、継続的な調査を実施してきた。今年度は、第7次5カ年計画の最終年に当たり、第74次、第75次の2次の調査を実施し、第74次調査では、門跡とみられる建物跡を発見し、第75次調査では北辺築地塀基壇の石垣を発見するなど、新たな知見を得ることができた。これらの成果を、いち早く今後の環境整備事業の中に生かすことで、多賀城跡を、一般の人々により親しまれる史跡公園として整備していきたい。

本書の刊行にあたり、日頃からご指導をいただいている多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会の関係者、調査を支援してくださった他の多くの皆様方に所員一同心から感謝申し上げる次第である。

平成16年3月

宮城県多賀城跡調査研究所

所長 加藤道男

## 目 次

I.	調査研究事業の計画	1
II.	第 74 次調査	
1.	調査の目的	3
2.	調査の経過	4
3.	調査成果	5
4.	考察	19
5.	まとめ	24
III.	第 75 次調査	
1.	調査の目的	26
2.	調査の経過	26
3.	調査成果	27
4.	考察	36
5.	まとめ	40
IV.	付章	42
1.	第 7 次 5 カ年計画の総括	42
2.	関連研究・普及活動	43
3.	組織と職員	47
4.	沿革と実績	48
	写真図版	53

## 例 言

1. 本書は平成 15 年度に実施した多賀城跡第 74・75 次調査の成果と、多賀城跡の環境整備、関連研究事業、普及活動の概要を収録したものである。
2. 当研究所の発掘調査と環境整備事業は多賀城跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに行っている。
3. 多賀城跡第 74・75 次調査の発掘調査体制、調査期間、調査面積は下記のとおりである。

調査主体 宮城県教育委員会

調査担当 宮城県多賀城跡調査研究所長

調査員 阿部恵・佐藤則之・古川一明・吾妻俊典・閑口重樹

調査期間 平成 15 年 5 月 6 日～平成 15 年 11 月 14 日

調査面積 約 1,500 m<sup>2</sup>

調査参加者 高橋 麗・黒井富士夫・猪俣信義・菊池輝夫・阿部成寿・後藤節子・鶴巻まき子・中村みつ江  
千葉莉枝・佐藤寿子・伊藤とし子・菊地みち子・与名本京子・若松かおり・下条千恵子・吉田 知  
大沼聖恵

門脇隆志・前田尚志・土屋和章（東北大学大学院）・山口紹香（東北大学）

3. 測量原点は政庁正殿跡身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めた。南北の基準線は真北に対して  $1^{\circ} 04' 00''$  東に偏している。
4. 瓦の分類基準は『多賀城跡政庁跡図録編』、『多賀城跡政庁跡本文編』による。
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 11 版』日本色研事業株式会社(1996 年)にもとづいた。
6. 青磁、白磁については、専修大学文学部教授亀井明徳氏からご教示をいただいた。
7. 本調査で得られた資料は、宮城県教育委員会で保管している。
8. 本調査の成果の一部は、『現地説明会資料』、『宮城県遺跡調査成果発表会資料』、『古代城柵官衙遺跡検討会資料』に紹介しているが、本書の内容が全てに優先する。
9. 本書は、調査員で討議と検討をおこない、II を佐藤、III を古川、I・IV を古川、吾妻、閑口が分担して執筆した。

## I. 調査研究事業の計画

当研究所では、多賀城跡の発掘調査、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査を計画的・継続的に実施している。ここでは、多賀城跡の発掘調査計画の概略について述べ、多賀城跡の環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査については、付章にその概要を収録した。

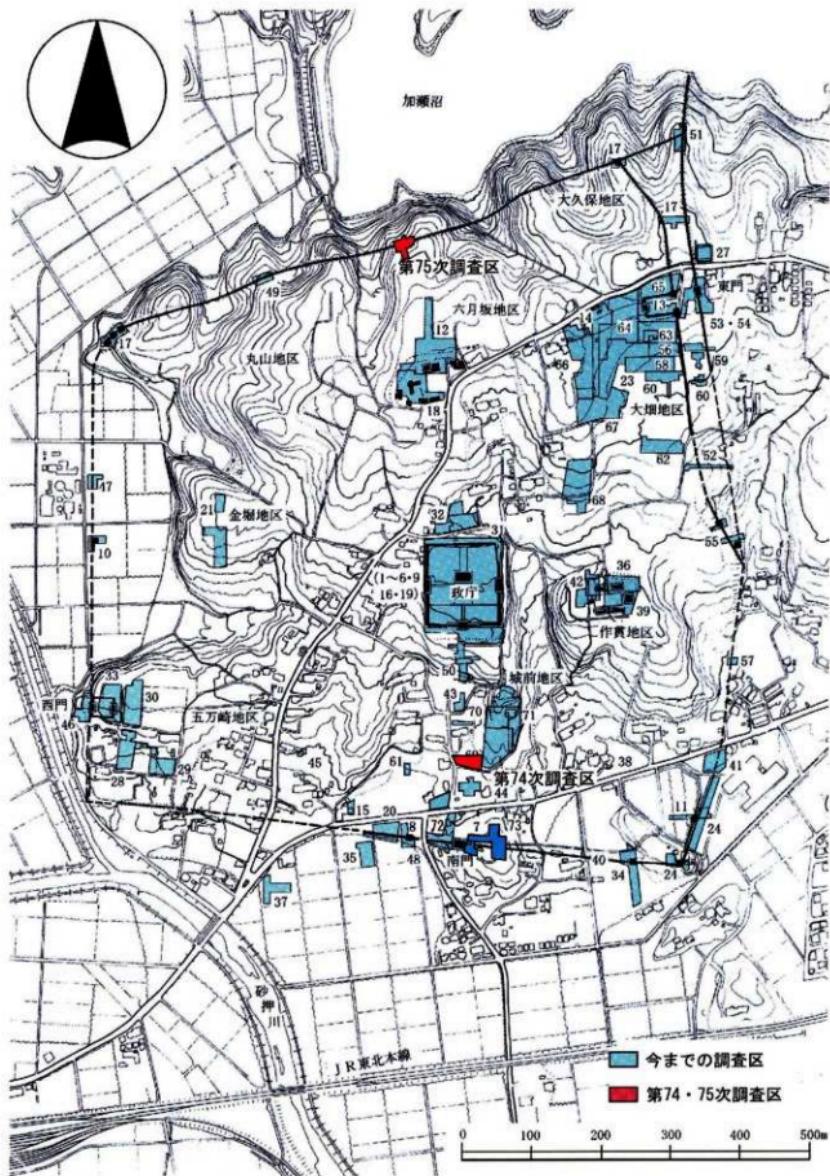
多賀城跡の発掘調査は、昭和 44 年の研究所設立以来、多賀城跡調査研究指導委員会の指導のもとに、5 カ年ごとの計画を立案し、実施している。本年度は、平成 10 年 11 月の第 9 回多賀城跡調査研究現地指導委員会で承認された多賀城跡発掘調査第 7 次 5 カ年計画（表 1）の第 5 年度に当たり、城前地区と六月坂地区を対象に第 74 次、第 75 次の 2 次の調査を実施した。

年次	発掘調査次数（対象地区）	調査面積	予算
平成 11 年度	第 70 次調査（城前地区南部）	2,000 m <sup>2</sup>	37,700 千円
平成 12 年度	第 71 次調査（城前地区南部）	2,000 m <sup>2</sup>	32,300 千円
平成 13 年度	第 72 次調査（南辺築地堀跡・政庁－南門間道路跡）	1,000 m <sup>2</sup>	28,900 千円
平成 14 年度	第 73 次調査（南辺築地堀跡） 第 74 次調査（政庁－南門間道路跡）	1,800 m <sup>2</sup>	26,000 千円
平成 15 年度	第 74 次調査（政庁－南門間道路跡） 第 75 次調査（外郭北門跡の状況）	1,800 m <sup>2</sup>	25,220 千円
合計	5 地区	8,600 m <sup>2</sup>	150,120 千円

表 1 多賀城跡発掘調査第 7 次 5 カ年計画

	氏名	現職	専門分野
委員長	須藤 隆	東北大大学教授	考古学
副委員長	今泉 隆雄	東北大大学教授	古代史学
委員	飯淵 康一	東北大大学教授	建築史学
委員	井手 久登	東京大学名誉教授	緑地学
委員	岡田 茂弘	東北歴史博物館館長	考古学
委員	笛山 晴生	東京大学名誉教授	古代史学
委員	佐藤 信	東京大学教授	古代史学
委員	町田 章	独立行政法人文化財研究所理事 奈良文化財研究所長	考古学
委員	渡辺 定夫	工学院大学教授	都市工学
委員	平川 南	国立歴史民俗博物館副館長	古代史学
委員	進士五十八	東京農業大学学長	造園学

表 2 多賀城跡調査研究指導委員会委員名簿



第1図 第74・75次調査区の位置

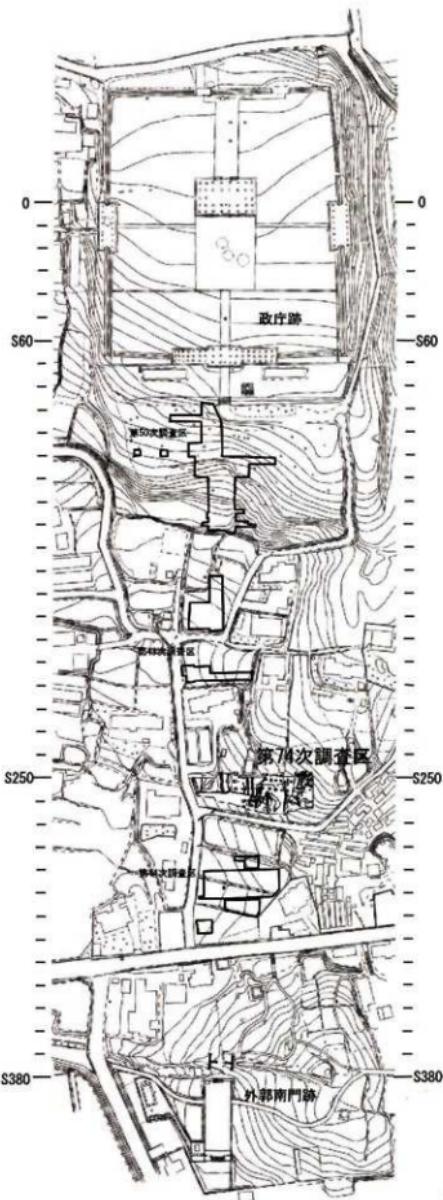
## II. 第74次調査

### 1. 調査の目的

第74次調査は政府～南門間の道路の変遷を再確認するため、多賀城市市川字城前の丘陵南端部を対象として実施した。

政府～南門間の道路については第43・44・50次調査を実施しており、斜面を削り、低い部分には盛土をした直線的な道路を確認していた。第43・44次調査では、道路側溝や盛土の違いから、政府第I・II期は路幅12m前後であり、政府第III期には路幅が約18mに、政府第IV期には約22mに拡幅されたと理解していた（年報1983）。ところが、第50次調査では、路幅18mの道路側溝が検出されなかつたことから第43・44次調査の結果を再検討し、路幅18mの道路の根拠となつた盛土の違いを工程差とみて、政府第I・II期は路幅13m前後であり、政府第III期には路幅が約23mに拡幅され、政府第IV期まで維持されたと見解を修正した（年報1987）。

一方、多賀城外では、その後に宮城県教育委員会や多賀城市埋蔵文化財調査センターによって、政府～南門間の道路の延長である「南北大路」が調査され、奈良時代の様子は不明なもの平安時代には大きく2時期の変遷があり、8世紀末頃には路幅19m程度であり、9世紀には路幅が23mほどに拡幅されたと考えられている（高野・菅原：1997など）。こういった状況から、多賀城内における路幅18mの道路の有無を再検討することを目的として今回の調査を実施することとなった。



第2図 城前地区平面図 (s=1/2000)

## 2.調査の経過

調査は2年次にわたって実施した。当初は平成14年度中に調査を完了する予定であったが、道路跡上で掘立柱建物跡の柱穴を検出し、周囲を広く調査する必要が生じたため、調査を翌年度に繰り越したものである。

平成14年度は9月11日から11月15日まで調査を行い、この間第73次調査や現状変更に伴う調査も並行して実施した（年報2002）。

9月11日に測量と調査区の設定を行い、9月18日から25日まで人力による表土等の除去を実施した。東西に長い調査区のうち、標高の低い西側では数枚の自然堆積層が存在し、それぞれの上面で精査をしたが、いずれからも遺構は検出されなかった。9月26日から精査を開始し、南北発掘基準線の東側で掘立柱建物跡とみられる柱穴を3個検出した（SB2776）。西側は削平のため柱穴は残っておらず、南北への延びを確認するために部分的に調査区を拡張したが、柱穴は検出されなかった。また、E-11ライン付近で、南北にのびる段を確認し、路幅23mの道路の東肩と判断した。

SB2776は道路上にあることから門の可能性があり、門とすれば接続する区画施設や東側の城前地区官衙との関わりの解明等様々な課題が生じたため、次年度に調査区を拡大して再調査することとし、11月15日に埋め戻した。

平成15年度は5月6日から9月24日まで実施した。調査区は前年度より東側へ拡げ、城前地区的第69次調査区と一部重複するように設定した。5月7日から重機による表土除去を行い、5月12日から遺構精査を開始した。その結果、調査区の地山は東から西へ、北から南へ傾斜しており、E27・17・11・4、W1付近で南北方向の段が確認された。このうちE11付近で確認された段は北側では浅い溝となっており（SD2771）、路幅23mの道路の東側溝と考えられた。また、W1付近の段は西側に深い溝（SD2770）があり、底面に瓦片や石が敷き詰められていることから、道路と考えた（SX2778）。これら以外の段は表土やそれに類似した堆積土に覆われており、新しい時期のものと考えた。また、門の可能性が考えられるSB2776は昨年度検出した部分より南へは延びておらず、北側を拡張したところ新たに2個の柱穴を検出した（5月27日）。

一方、調査区の東側では城前地区的官衙の一部と考えられる柱穴が検出され、掘立柱建物跡（SB2755）塹跡（SA2756）と考えられた。この部分には北側と南側に大きな土壙があり、北側のSK2786はSB2755より古く、上面には炭化物や焼土が堆積していた（SX2762）。また、南側のSK2754を掘り下げたところ、下層で竪穴住居跡（SI2766）を検出し、掘り上げた（6月13日）。SI2766の東側にはSI2765があり、両者の時期は8世紀末葉頃であった。また、6月20日にはSI2765と重複しこれより古い掘立柱建物跡（SB2777）を検出した。この建物跡は方向が道路跡や門の可能性が考えられるSB2776と一致しており、位置関係からもこれらと密接な関係があると考えられた。これらの平面図と断面図を作成し、写真撮影などを行った。なお、今調査では平面図の作成にはデジタル機器による作図を併用した。

調査の成果がまとまったため、7月10日に報道関係者に調査成果を公表し、7月12日には一般を

対象とした現地説明会を開催し、100名余りの参加があった。

9月12日には多賀城跡調査研究指導委員会による現地見学を行い、有益な指導を受けた。また、平成15年度宮城県遺跡調査成果発表会（12月20日）と第30回古代城柵官衙遺跡検討会（平成16年2月29日）で調査成果を発表した。

### 3. 調査成果

#### （1）地形と層序

この場所は、政府地区から東へ延びる城前地区の官衙が展開する丘陵の南端に当たる。西側には鴻の池がある大きな沢が北へ延びて政府西側まで達している。また、すぐ南側にはこの大きな沢から派生した沢が外郭南門のある丘陵との間に入り込んでいる。

調査区は東西に長く、東から西へと北から南へ大きく傾斜している。東端の標高は約14.5m、西端の標高は約8.3mである。東側は表土を除去すると遺構検出面である地山になるが、西側には数枚の自然堆積層があり、これらを除去して古代の遺構を検出した。これらは表土とよく似たしまりのない黒色土であり、比較的新しい時期のものと考えた。

#### （2）発見した遺構と遺物

第74次調査で発見した遺構には、道路跡、掘立柱建物跡、堀跡、竪穴住居跡、溝、土墳などがあり、これらの遺構や堆積層・表土から土師器、須恵器、瓦などが出土した。以下、種類ごとに説明する。

## A. 道路跡

道路跡は2条検出された。いずれも南北の発掘基準線付近にある。以下、古い順に説明する。

### 【S X2785 道路跡】

地山を削り出して路面を造成し、東側にS D2771側溝を付設した道路跡である。

S B2776・2777掘立柱建物跡、S X2778道路跡、S D2774・2780・2781溝と重複しており、S X2778とS D2780・2781よりは古いが、他との新旧は不明である。

路幅は削平のため判然としないが、南北発掘基準線を中心として東側溝の中央を折り返すと約21mとなり、これに近い数値と考えられる。路面は、大部分が削平により失われていたが、東側溝付近に幅2~3mほどで廃絶時の路面が残っていた。バラス等の舗装や盛土整地の痕跡は確認されなかった。

S D2771東側溝は残存状況が悪く、一部が溝状になっているが大半は東肩のみが残る段状になっている。E10.5にあり、方向は南北発掘基準線にほぼ一致している。幅は約1.0mで、深さは東肩の段状の部分で約0.3mであり、路面から最も深い部分で2cmである。堆積土は自然堆積の黄褐色シルトである。

S D2771東側溝やS X2785道路跡を覆う堆積土から、土師器坏・椀、須恵器坏・甕、丸瓦IA・IB類、平瓦IIB・IIC類が出土しており、いずれも小破片である。

### **【S X2778 道路跡】**

S X2785 道路跡のW1 以西を削平して平坦面を造成したもので、平坦面には S D2770 溝があり、両者は同じ堆積層に覆われている。また、S D2770 は断面形が皿状の浅い溝で、底面には瓦や土器、石が敷き詰められており、通路として使用されたと思われる。こういった状況から、この平坦面は道路であった可能性が考えられる。

S X2785 道路跡や S D2780・2781 溝と重複しており、前者より新しく、後者より古い。また、S B 2776 挖立柱建物跡が西側へ延びていたとすれば、これより新しいと思われる。

削り出しの段は W1 付近にあり、方向は南北発掘基準線とほぼ同じと思われる。高さは 0.3m 程で、自然堆積したにぶい黄褐色のシルトなどで覆われている。

S D2770 溝は北東から南西に斜めに延びており、上幅 2.4~3.9m、下幅 1.0~2.0m、深さ 0.1m 程である。堆積土は自然堆積の灰黄褐色シルトである。

S D2770 溝底面や堆積土から、土師器坏、丸瓦 II B 類、平瓦 IC・II B・II C 類、青磁水注（第 13 図 11）が出土した。青磁水注は把手基部の小片であり、越州窯系の製品で、9~10 世紀代のものである（註 1）。

### **B. 挖立柱建物跡**

掘立柱建物跡は 3 棟発見された。いずれも部分的な検出で、規模等が分かるものはない。

#### **【S B2755 挖立柱建物跡】**

東西 3 間、南北 1 間以上の建物で、さらに北側の調査区外へ延びていると思われる。部分的に柱穴が重複しており、一度建て替えられている可能性がある。

S K2786 土墳、S D2761 溝、S X2773 暗渠、S X2762 炭化物層と重複し、S X2762 と S K2786 よりは新しい。S X2773 と S D2761 は位置関係から S B2755 に付属するものの可能性がある。

柱間は、東西が北側柱列で東から、2.0m・2.5m・1.8m で総長 6.3m であり、南北が東側柱列で 2.1m である。方向は北側柱列で、発掘基準線に対して西で北へ約 4 度振れている。

柱穴は一辺が 1m 程の方形もしくは隅丸方形で、柱痕跡は直径が 0.2~0.3m の円形である。

柱穴掘方埋土から丸瓦 II 類と平瓦 IB・IC・II B 類が出土し、柱抜き取り穴と柱痕跡から丸瓦 II 類と平瓦 II A 類が出土した。

#### **【S B2776 挖立柱建物跡】**

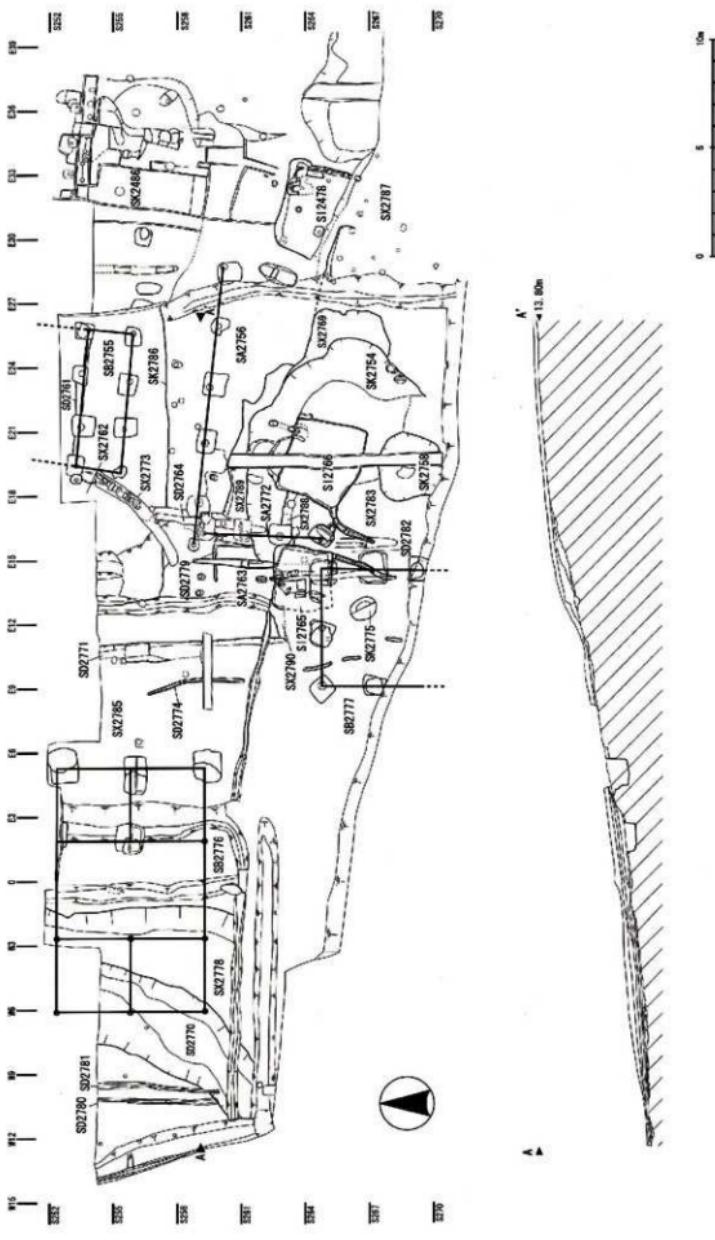
S X2785 道路跡上で検出した南北 2 間以上、東西 1 間以上の掘立柱建物跡と思われ、位置や柱穴の並び方などから門であった可能性が考えられる。

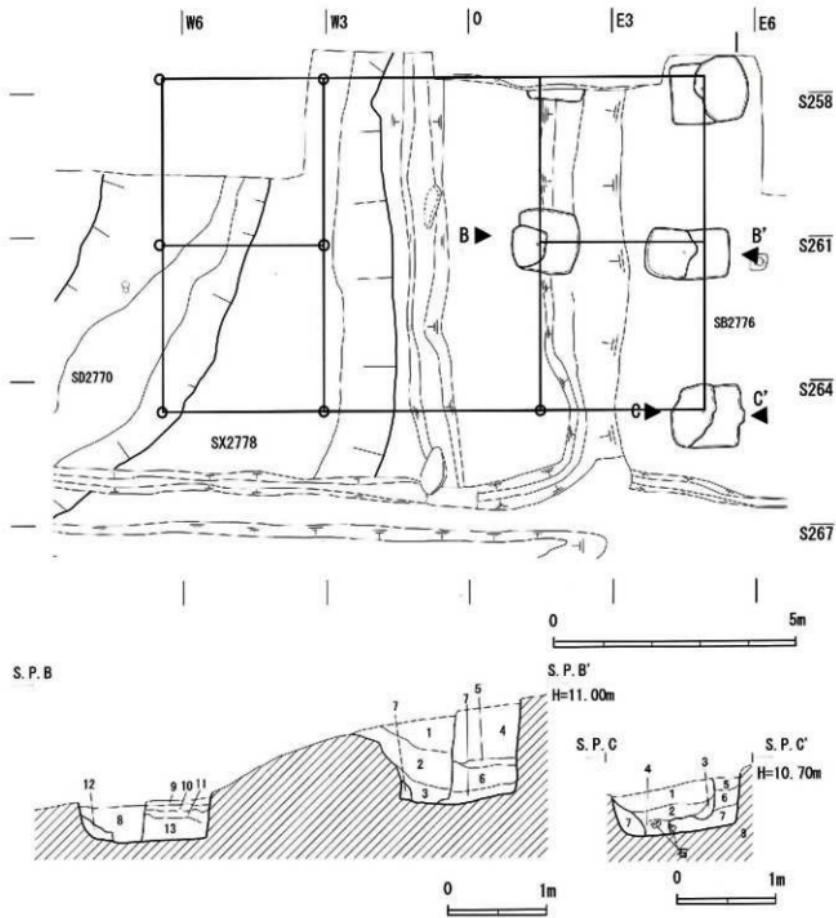
S X2785 道路跡と重複しているが、新旧は不明である。また、本建物跡が西へ延びていた場合、S X2778 道路跡と重複し、これより古いと思われる。

柱はすべて抜き取られており、柱間は、柱穴の中心や柱あたり痕跡で計測すると、南北が東側柱列で北から、3.4m・3.4m であり、東西が中央の柱列で 3.1m である。建物の方向は発掘基準線とほぼ一致している。

柱穴は一辺が 1.0~1.3m の方形で、深さは深いもので 1.0m である。埋土は地山のブロックを多量に

第3図 第74次調査区 平面図・断面図





第4図 SB2776 建物跡

含む暗赤褐色や黄褐色のシルトで、この付近の地山には存在しない暗赤褐色のシルトが多く使われているのが特徴的である。柱痕跡は直径が0.3~0.4mの円形である。

#### 【SB2777 捩立柱建物跡】

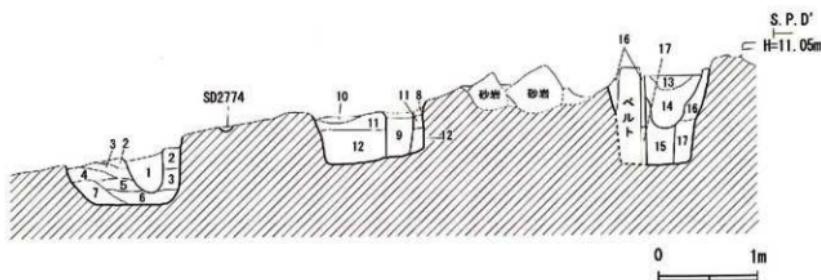
桁行3間以上、梁行2間の南北棟と考えられる建物跡で、さらに調査区外の南側へ延びている。北妻西端の柱穴は方向が斜めである。

S X2785 道路跡、S A2763 材木堆跡、S I 2765 壘穴住居跡、S K2754・2775 土墳、S X2788 段跡、

S X2783 岩化物層と重複し、S X2788 より新しく、S X2783、S I 2765、S K2754 より古い。S X2785 と S K2775 との新旧は不明である。一方、S A2763 とは同時に存在した可能性が考えられる。

柱はすべて抜き取られている。柱間は、柱痕跡や柱穴の中心で計測すると、桁行が東側柱列で北から、2.4m・2.3m であり、梁行が北妻で東から 2.7m・2.7m である。建物の方向は発掘基準線とほぼ一致している。

柱穴は一辺が 1.0~1.4m の方形で、深さは深いもので 1.1m である。埋土は地山のブロックを多量に含む黄褐色シルトなどで、地山に極めて類似している。柱痕跡は直径が 0.3m の円形である。



第 5 図 SB2777 建物跡北妻柱穴断面図

### C. 塙跡

塙跡は 3 条ある。東西方向が 1 条、南北方向が 2 条である。

#### 【S A2756 塙跡】

柱列による塙跡で、東西方向に 5 間ある。かなり削平を受けており、消滅しそうになっている柱穴もある。位置関係や方向から、S B2755 挖立柱建物跡に付属するものと考えられる。

S A2772 塙跡と SD2764 溝と重複しており、S A2772 より新しく、SD2764 より古い。

柱間は、東から 2.8m・2.8m・2.5m・2.8m・2.0m で、総長 12.9m である。方向は発掘基準線に對し西で北へ 6 度振れている。

柱穴は一辺が 1m 前後の方形を基準とすると思われるが、西端の柱穴は一辺が 0.5m と小さい。柱痕跡は直径が 0.3m 程の円形である。

#### 【S A2772 塙跡】

柱列による塙跡で、南北方向に 3 間ある。

S X2788・2789 段跡、S I 2765 壁穴住跡、S A2756 塙跡、S K2754 土壇、SD2764 溝と重複しており、S X2788 より新しく、S I 2765、S A2756、S K2754 よりも古い。S X2789 とは重複状況を確認しないまま掘り下げたため、新旧は不明である。

柱間は、北から 2.0m・1.9m・1.9m で、総長 5.8m である。方向は発掘基準線に對し北で東へ 4 度振れている。

柱穴は一辺が0.8~1.0mの方形であり、深さは1.1mである。埋土は地山のブロックを多量に含む明黄褐色シルトなどである。柱痕跡は直径が0.3m程の円形である。

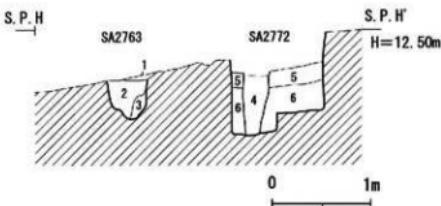
柱抜き取り穴から須恵器甕の体部破片が出土した。

#### 【S A2763 塙跡】

南北に延びる材木塙跡で、材は抜き取られている。

S B2777 捜立柱建物跡、S I 2765 穫穴住居跡、S K2754 土墳跡、S D2779 溝跡と重複しており、S I 2765 と S K2754 よりも古い。S I 2777 とは同時に存在した可能性が考えられ、S D2779 とは切り合いを確認できなかつたため、新旧は不明である。

抜き取り溝を確認しており、幅0.4m、深さ0.5m以上、長さ5.4m以上で、南端がS B2777 の柱抜き取り穴によって壊されている。方向は発掘基準線に対し北で東へ4度程振れている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、埋土は黄褐色シルトなどである。



第6図 S A2763・2772 塙跡 断面図

#### D. 穫穴住居跡

竪穴住居跡は3棟検出された。うち1棟は第69次調査で検出されたものの西半分である(S I 2478)。

#### 【S I 2478 穫穴住居跡】

第69次調査で東半部が調査されている(年報1998)。ここでは新たに判明したことがらを中心に記述する。

規模は東西が北辺で約4.5m、南北が東辺で2.9m以上であり、南側はS X2787 平場跡によって壊されている。平面形は方形と考えられる。

主柱穴2個が報告されているが、西・南側を調査した結果、位置関係などからこれらの柱穴は住跡跡に伴うものではないと思われる。

床面より土師器壺・甕、須恵器壺(第7図1)・高台壺・壺・甕、平瓦I・II類が出土した。また、堆積土からは丸瓦IIB類、平瓦IIB類が出土した。これらの年代は8世紀末葉~9世紀前半頃と考えられており(年報1998)、今回出土した遺物の年代も同様に考えられる。

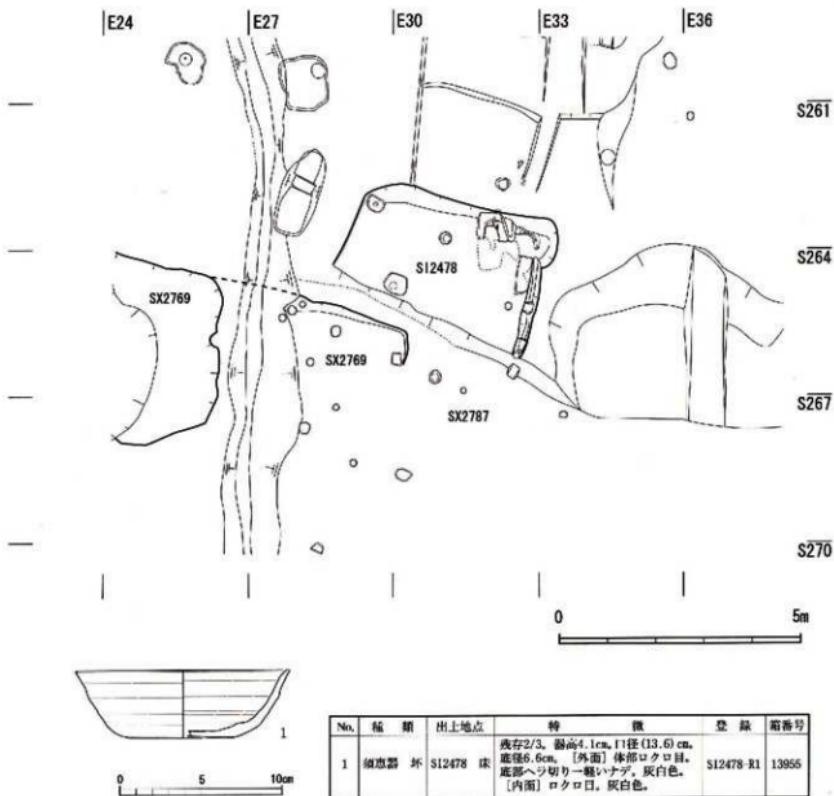
#### 【S I 2765 穫穴住居跡】

東西が北辺で2.4m、南北が東辺で2.6mであり、深さは最も残りのよい北側で0.6mである。平面形は方形である。方向は北辺で、西で北へ4度振れている。柱穴や周溝は検出されなかつた。

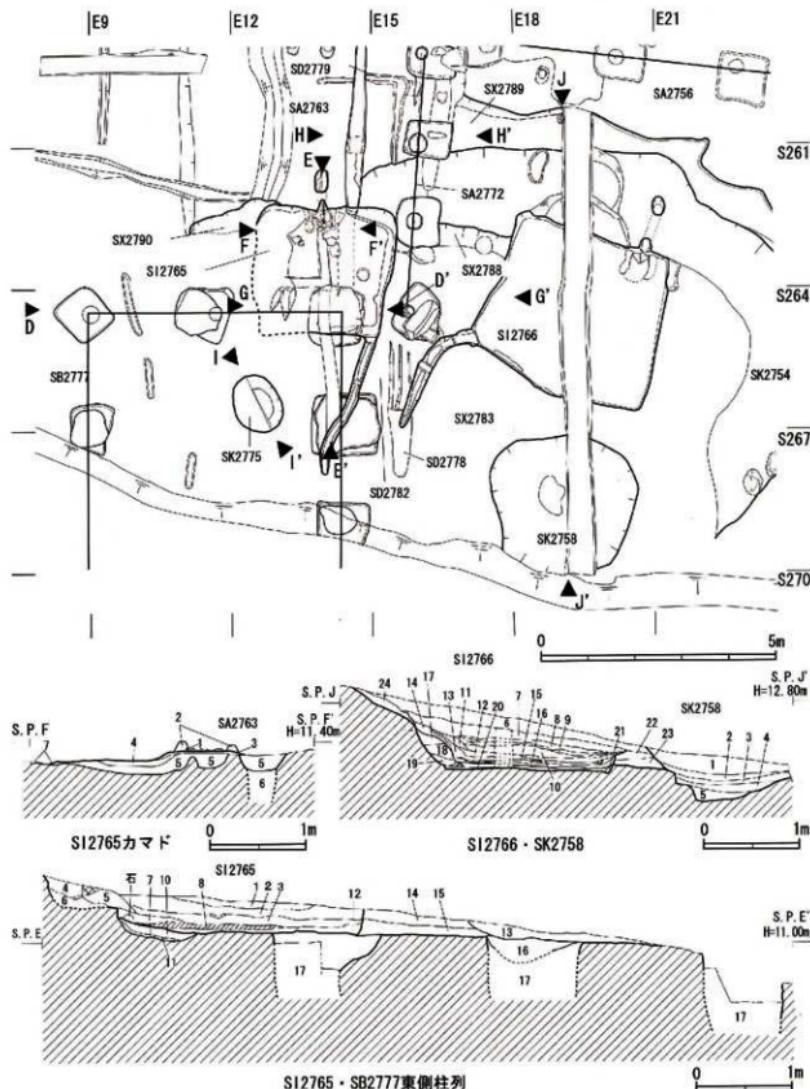
S B2777 捜立柱建物跡、S A2763・2772 塙跡、S K2754 土墳、S X2788・2790 段跡、S X2783 炭化物層と重複し、いずれよりも新しい。

床面はほぼ平坦で、地山ブロックを多く含む黄褐色砂質シルトで貼床されている。

カマドは北辺の中央にあり、周囲を大きく皿状に掘り下げて地山ブロックを多く含む黄褐色砂質シルトで埋め戻した後に構築されている。長さ 0.5m、幅 0.9m であり、側壁が高さ 0.2m 程残っていた。燃焼部中央には支脚の石が据えられており、焚き口部には須恵器高台壺などの破片を敷いていた。煙道は地山をくりぬいたトンネル式で、長さは 0.7m である。燃焼部前面の床面には、カマドから掻き出された炭化物が堆積していた。



第7図 S12478 堅穴住居跡とその出土遺物



第8図 SI 2765・2766 堅穴住居跡

ところで、燃焼部内やカマド周辺の床面には、カマドの一部だったと思われる粘土や焼土などが散布しており、廃絶時にカマドを破壊したことを窺わせる。

住居跡の南東隅から排水のためと考えられる外延溝が延びている。幅は0.3mで深さは0.1mであり、堆積土は褐灰色粘土である。

堆積土は褐灰色の粘土などで、自然堆積である。床面近くには遺物が多く含まれていた。

床面下の住居跡掘方から土師器甕、床面から須恵器坏、丸瓦II類、平瓦IA・IIB類、カマド底面から須恵器高台坏（第10図3）、堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏(2)・瓶・甕(4)、丸瓦IA・IIB類、平瓦IA・IIB類が出土した。これらの年代は、須恵器坏・高台坏の器形や製作技法から8世紀末葉から9世紀前半頃と思われる。

#### 【S I 2766 竪穴住居跡】

東西が南辺で4.0m、南北が東辺で3.3mであり、深さは最も残りのよい北側で0.5mである。平面形は南辺と東辺が長いやや歪んだ方形である。方向は北辺で、西で北へ18度振れている。柱穴や周溝は検出されなかった。

S X2788段跡、S K2754土壇、S X2783炭化物層と重複し、いずれよりも新しい。

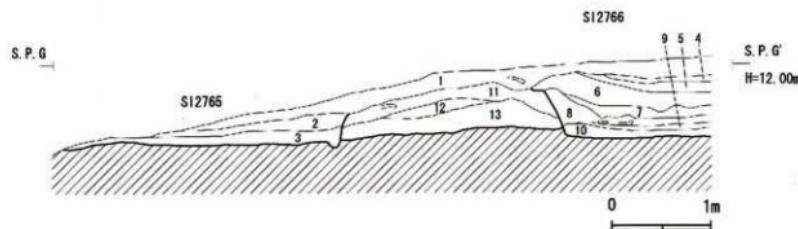
床面はほぼ平坦で、地山ブロックを多く含む褐灰色シルトで貼床されている。

カマドは北辺の東寄りにあり、長さ0.6m、幅0.8mであり、天井部や側壁などはほとんど残っていない。奥壁付近に平瓦の破片が2枚敷き込んでいた。煙道は地山を割りぬいたトンネル式で、長さは1.0mである。

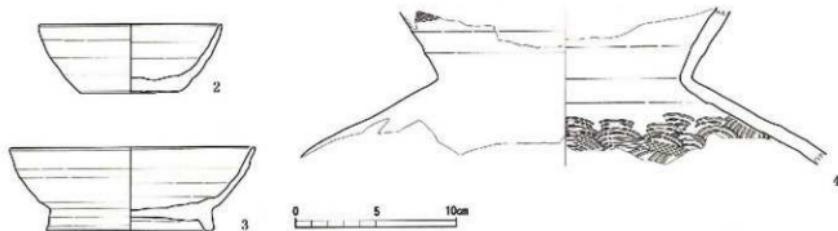
住居跡の南西隅から排水のためと考えられる外延溝が延びている。幅は0.3mで深さは0.1mであり、堆積土は褐灰色粘土である。

堆積土は瓦を多量に含む灰黄褐色の粘土とにぶい黄褐色の砂などが交互に堆積したもので、自然堆積である。

床面から、須恵器甕が出土し、堆積土から土師器坏（第11図5）・甕、須恵器坏・高台坏(6)・鉢(7)、丸瓦IA・IIB類、平瓦IA・IB・IC・IIB類が出土した。これらの年代は、土師器坏や須恵器高台の器形や製作技法から8世紀末葉から9世紀前半頃と思われる。

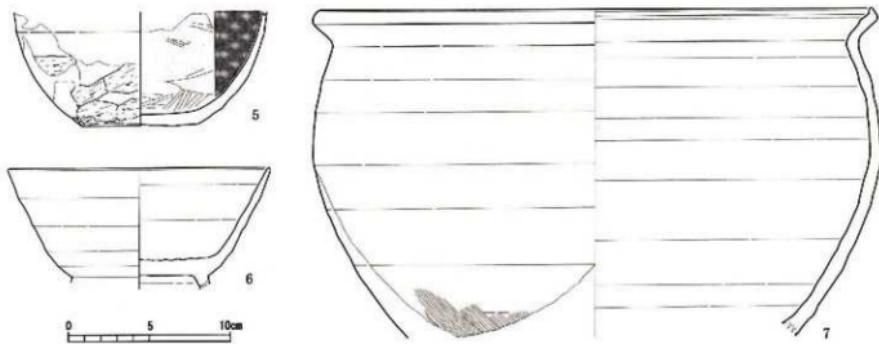


第9図 S I 2765-2766 竪穴住居跡断面図



No.	種類	出土地點	特徴	登録	箱番号
2	須恵器 壺	SI2765-2層	残存4/5。器高4.2cm。口径11.3~11.5cm。底径6.2~6.4cm。[外]ロクロ目。底部ヘラ切り一手持ハラケズリ。灰色。[内]ロクロ目。灰色。	SI2765-R11	13956
3	須恵器高台壺	SI2765(カマド) SI2765(床)	カマドの炭上面で破砕し、散詰められ出土。一部の破片はSI2766床から出土。底部外表面の摩滅が著しい。残存4/5。器高5.1cm。口径15.0cm。高台径10.2~10.4cm。[外]体部ロクロ目。底部回転ハラケズリ。灰褐色。[内]ロクロ目。灰褐色。	SI2765-R12	13956
4	須恵器 壺	SI2765-2層	残存1/4。[外]ロ織部ロクロ目。波状の櫛書き。体部回転ハケメ。自然釉。[内]ロ織部ロクロ目。円文様のあて具痕。灰色。	SI2765-R13	13957

第10図 SI2765 堅穴住居跡 出土遺物



No.	種類	出土地點	特徴	登録	箱番号
5	土師器壺	SI2766	残存2/3。底径7.2cm。全体に摩滅が著しい。[外]体部ロクロ目。体中央部~底部手持ハラケズリ。黄褐色。[内]ヘラミガキー黒色処理。	SI2766-R18	13960
6	須恵器高台壺	SI2766	残存2/5。口径(16.2)cm。[外]体部ロクロ目。底部回転ハラケズリ。灰色。[内]ロクロ目。褐灰色。	SI2766-R19	13960
7	須恵器鉢	SI2766	残存1/4。口径(34.4)cm。[外]ロクロ目。体部下端にヘラナデ。灰色。[内]ロクロ目。澄褐色。	SI2766-R20	13960

第11図 SI2766 堅穴住居跡 出土遺物

## E. 溝

溝は多数検出されたが、埋土の状況などから大部分は近年のものと思われる。以下、主要な古代のものについて説明する。

### 【S D2764 溝】

南北に直線的に延びる溝で、北は S X2773 暗渠付近で、南側は S K2754 土壇付近で途切れている。

S X2773 暗渠、S A2756・2772 壁跡、S K2754 土壇と重複しており、いずれよりも新しい。

幅は 0.6m 程で、長さ 6.0m にわたって検出した。

堆積土から土器器皿、丸瓦 IA・II 類、平瓦 IA・IC・II B 類が出土した。

### 【S D2774 溝】

南北に延びる細長い溝で、S X2785 道路跡の東側溝 S D2771 の西側で検出した。

S X2785 道路跡と重複しており、S D2771 や道路の路面を覆っている堆積土に覆われていることから、S X2785 と同時期かより古いと思われる。

長さは約 4.6m で、幅 0.2m 程、深さ 5cm 前後である。

### 【S D2779 溝】

鍵の手に曲がる溝で、南端は S K2754 土壇によって壊されている。

S A2763 壁跡と S K2754 土壇、S X2789 段跡と重複しており、S X2789 の埋土を取り払った段階で検出したが、各遺構との切り合い状況を確認しなかったため、新旧は不明である。

幅は 0.2m 程で、深さは 0.1m 前後であり、長さは東西が約 1.9m・南北が 1.9m 以上である。

堆積土から土器器皿、須恵器杯・甕、丸瓦 IA・II 類、平瓦 III B 類が出土した。

## F. 土壇

調査区東半部で 8 基検出した。以下、主要なものについて説明する。

### 【S K2486 土壇】

第 69 次調査で検出した土壇の西半部で、西端が耕作時の段によって壊されている。

S K2487・2786 土壇と重複し、S K2487 より古く、S K2786 より新しい。

堆積土から土器器皿、甕、須恵器杯・高台杯・蓋・壺・甕（第 13 図 9）、丸瓦 II B 類、平瓦 IA・IB・IC・ID・II A・II B 類が出土した。第 69 次調査では遺物の年代は 8 世紀前葉～後半頃と考えられており（年報 1998）、今回出土した遺物の年代も同様に考えられる。

### 【S K2754 土壇】

調査区中央部にある大規模な土壇で、南側は削平されている。

S B2777 挖立柱建物跡、S A2763・2772 壁跡、S I 2765・2766 穴住居跡、S D2764・2779 溝、S K2758 土壇、S X2769・2788・2789 段跡と重複し、S I 2765・2766 と S D2764、S K2758 より古く、S A2763・2772 と S X2769・2788 より新しいが、S B2777 と SD2779、S X2789 との新旧は不明である。

東西 11.4m 程、南北 7m 以上で、深さは最も深い部分で 1.6m 程である。底面は比較的平坦で、凹凸がない。堆積土は上下 2 層に大別され、上層はにぶい黄褐色シルトなど、下層は地山ブロックを多く含む黄褐色砂質シルトで、いずれも自然堆積である。

堆積土上層から多量の遺物が出土し、土師器壺・甕、須恵器壺・高台壺・蓋・鉢・壺(第13図10)・甕、灰釉陶器皿、丸瓦IA・II B類、平瓦IA・IB・IC・ID・II A・II B・II C類が出土した。これらが堆積した年代は、政府第IV期の瓦を含むことや、須恵系土器が全く含まれないことから概ね9世紀後半頃と思われる。

堆積土下層からは須恵器甕が出土した。

#### 【SK2758 土壇】

S K2754 土壇の堆積土上面から掘り込まれた土壇で、南端部が削平されている。

S K2754 土壇と重複し、これより新しい。

平面形はやや歪んだ円形で、東西約3.2m、南北3m程で、深さは約1.4mであり、断面形はロート状を呈する。下層は地山ブロックが多く含む灰黄褐色シルトなどで埋め戻されており、上層には炭化物や焼土を含む褐色シルトが自然堆積していた。

上層から土師器壺・甕、須恵器甕、須恵系土器壺・高台壺、白磁碗(第13図8)、丸瓦IA・II類、平瓦II B・II C類が出土し、下層からは土師器壺、須恵器壺が出土した。このうち、白磁碗は、玉縁状の口唇部や胎土などから、9世紀代の邪州窯様式のものである(註2)。

#### 【SK2775 土壇】

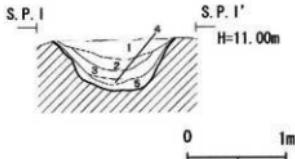
S B2777 掘立柱建物跡と重複しているが、新旧は不明である。

平面形は長楕円形で、長径1.3m、短径1.0m、深さ0.5mである。離堆積土は褐色シルトや灰黄褐色粘土などで、自然堆積である。堆積土から丸瓦II類・平瓦II B・II C類が出土した。

#### 【SK2786 土壇】

調査区の北東部にあり、さらに北側に延びている。断ち割り調査等を実施しなかったため詳細は不明であるが、東西14m以上ある。

S B2755 掘立柱建物跡、S D2764 溝、S K2486 土壇、S X2762 炭化物層、S X2773 暗渠と重複し、いずれよりも古い。地山ブロックが多く含むシルトで埋め戻されている。



第12図 SK2775 土壇断面図

## G. その他

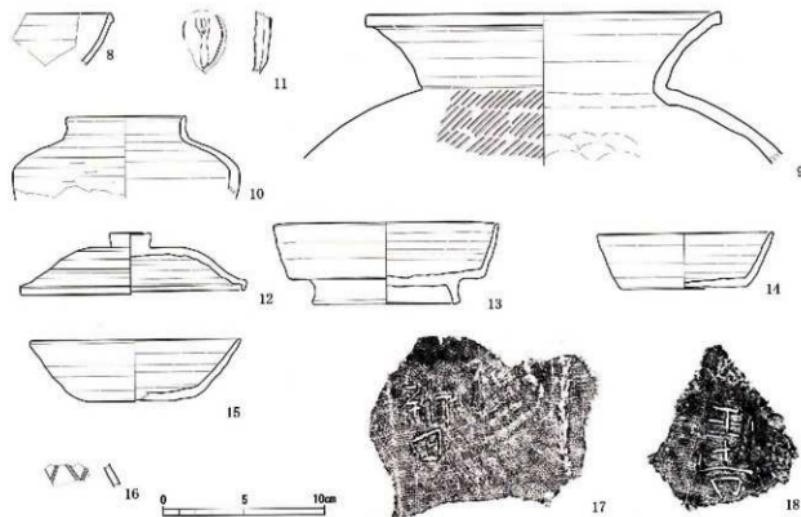
削り出しによる段跡や狭い範囲に分布する炭化物層、暗渠がある。

#### 【SX2769 段跡】

E24からE30まで東西に延びる削り出しによる段跡で、E27付近では耕作時の段によって途切れている。S K2754 土壇、S X2787 平場跡と重複し、いずれよりも古い。高さは最も高い部分で約0.2mである。段には地山に類似した粘質の褐色シルトが自然堆積している。

### 【S X2788 段跡】

K2754 土墳の底面で検出した東西方向の段跡で、重複する各遺構に壊されているため、詳細は不明である。S A2763・2772 壁跡、S I 2765・2766 窓穴住居跡、S K2754 土墳と重複し、いずれよりも古い。高さは残りの良い部分で約 0.4m であり、地山に類似した明黄褐色シルトで埋め戻されていた。



No.	種類	出土地点	特徴	登録	箱番号
8	白磁 蘭	SK2758-1 層	口縁部の破片。玉縁口縁。外面上に淡黄色(2.5Y8/3)の軸。 [外面]ロクロ目。胎土は特に精緻。邢州窯様式。9世紀。	SK2758-R3	13956
9	須恵器 蓋	SK2486-1 層	残存 1/4。口径(22.2)cm。[外面]口縁部ロクロ目。体部平行タタキ目。灰色 [内面]ロクロ目。頂部指圧痕。体部無文様のあて具痕。灰色。	SK2486-R21	13955
10	須恵器 壺	SK2754-2 層 SK2768-1 層	残存 1/2。口径 7.6cm。[外面]ロクロ目。体部回転ヘラケツリ。灰色 [内面]ロクロ目。灰色。	SK2754-R9	13956
11	青磁 水注	SD2770-1 層	把手基部破片。外面上に灰オーライプ色(7.5Y5/3)の軸。内面上ロクロ目。胎土は特に精緻。磁州窯。9~10世紀。	SD2770-R1	13960
12	須恵器 蓋	SX2762-1 層	残存 2/3。器高 3.8cm。口径 13.8cm。つまみの径 2.6cm 町台形状のつまみ。 [外面]ロクロ目。天井部回転ヘラケツリ。灰色。[内面]ロクロ目。灰色。	SK2762-R2	13956
13	須恵器 高台壺	SX2762-1 層	残存 3/5。口径(14.0)cm。高台径 9.2cm。[内外面]ロクロ目。灰色。	SK2762-R3	13956
14	須恵器 壺	SK2769-1 層	残存 1/4。器高 3.4cm。口径(11.0)cm。底部(7.8)cm。[外面]体部ロクロ目。 底部手持ヘラケツリ。灰色。[内面]ロクロ目。灰色。	SK2769-R23	13960
15	須恵器 壺	表土	残存 1/4。器高 4.8cm。口径(13.0)cm。底部(6.8)cm。[内外面]ロクロ目。灰色。	表土-R44	13961
16	円面甕	表土	[外面]斜行する沈線 3 条。灰色。[内面]ロクロ目。灰色。	表土-R46	13961
17	二重弧文軒平瓦 型番 511	表土	軒面。平行タタキ目→腰面文と沈線 2 条。断面三角形。凹面布目。刻書「新田」。	表土-R6	13961
18	平瓦 1A 類	表土	凸面ケツリ。凹面布目→ナゲ。刻書「玉造」。	表土-R39	13961

第 13 図 土墳・溝・表土出土の遺物

### **【S X2789 段跡】**

E15 から E24 付近まで東西に延びる段跡で、SK2754 土墳によって南側を、耕作時の段によって西側を削平されている。SA2772 堀跡、SD2764・2779 溝、SK2754 土墳と重複し、SD2764 溝より古いが、SK2754 土墳の一部として掘り下げたため、他の遺構との新旧は不明である。高さは最も高い部分で約 0.2m である。段は地山ブロックを多く含むシルトで埋まっていた。

### **【S X2790 段跡】**

東西方向の段で、SI2765 竪穴住居跡によって東側が壊されている。SI2765 竪穴住居跡と重複し、これより古い。段には地山に類似した粘質の褐色シルトが自然堆積している。

### **【S X2787 平場跡】**

地山を削りだして平坦面を造成したもので、南側と西側は削平によって壊されている。

SI2478 竪穴住居跡、SK2488 土墳、SX2769 段跡と重複しており、SI2478 と SX2769 より新しく、SK2488 との新旧は不明である。段の高さは最も高い部分で 0.3m 程であり、平坦面は東西 7m 以上、南北 5m 以上である。平坦面では小ピットが検出され、掘立柱建物が存在したと思われるが、大きく削平されているため詳細は不明である。

### **【S X2762 炭化物層】**

炭化物や焼土、瓦などを多量に含む自然堆積層で、SB2755 掘立柱建物跡の北側拡張部分に分布する。SB2755 掘立柱建物、SK2786 土墳、SX2773 暗渠と重複しており、SB2755、SX2773 より古く、SK2786 よりも新しい。層中から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏(第13図13)・蓋(12)・甕、丸瓦II B 類、平瓦II B 類が出土した。これらの年代は、須恵器高台坏・蓋の器形などから 8世紀末葉から 8世紀前半頃と思われる。

### **【S X2773 暗渠】**

瓦を敷き並べて暗渠としたもので、斜面下方の南西方向に延びている。SB2755 掘立柱建物跡、SD2764 溝、SK2786 土墳、SX2762 炭化物層と重複し、SD2764 と SK2786、SX2762 よりは新しい。また、位置関係から SB2755 建物跡に付属する可能性が考えられる。

暗渠は、瓦を据える溝を掘り、溝の底面に半割した瓦を凹面を上にして溝に沿って敷き並べ、その上に半割した瓦片を凸面を上にして載せたものである。

これらの他に表土などから土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏(第13図15)・高台坏・蓋・鉢・壺・甕、須恵系土器高台坏、緑釉陶器の高台部分、円面硯(16)、丸瓦 IA・II B 類、平瓦 IA・IB・IC・ID・II B・II C 類、永楽通宝が出土した。平瓦には凹面に「新田」(17) や「玉造」(18) とヘラ書きされたものがある。

## 4. 考察

今回の調査では、道路跡 2、掘立柱建物跡 3、堀跡 3 の他溝や土墻、平場跡、段跡などを検出した。また、土師器、須恵器、灰紺陶器、緑紺陶器、青磁、白磁、円面硯、瓦、永楽通宝などが出土した。以下ではまず遺構ごとに年代や変遷などを検討し、次に時期ごとの本調査区の様子について述べることとする。

なお、調査地区は政庁～南門間の道路上にあたるとともに、城前地区的官衙が存在する丘陵の南端部でもある。道路跡（年報 1987）や外郭南門（年報 1985）、城前地区的官衙（年報 2000）はそれぞれ別個に変遷と年代などが検討されているため、これらと政庁地区的遺構期との関係を簡単にまとめると下表のようになる。

政庁地区	外郭南門	政庁～南門間道路	城前地区	備考
I	A 柱穴 1 個	IA		大野東人による創建
		IB		
II	B 礎石掘穴 1 個	II A	A	皆麻呂の反乱による火災で焼失
		II B		
III-1	C1		B1	火災後の暫定的な時期
III-2	C2	C	B2	本格的な復興
IV-1			B3	地震後の復旧
IV-2			C	灰白色火山灰降下
IV-3				

以下では主に政庁の遺構期を用いて検討するが、城前地区的官衙と関連する遺構については城前地区的遺構期を用いることにする。

### A 道路跡

#### 【S X2785 道路跡】

東側溝 S D2771 とその西側にわずかに残った路面を検出した。S D2771 は、20m 程南側にある第 44 次調査区で検出された S X1411B・C 道路跡の東肩と政庁中軸線（註 3）からほぼ同じ距離にあることから、両者は一連のもので、政庁第 III・IV 期の道路跡と考えられる。

なお、本調査区の南北両側で政庁第 I・II 期の道路跡が検出されており、本調査区にもこの時期の道路跡は間違いなく存在したと考えられる。

ところで、政庁～南門間の道路は第 43・44・50 次調査の結果、大規模な切り盛りによって造成された直線的な道路であることが確認されていた。年代や変遷、規模については、第 43・44 次調査で

は、政庁第Ⅰ・Ⅱ期は路幅12m前後であり、政庁第Ⅲ期には路幅が約18mに、政庁第Ⅳ期には約22mに拡幅されたとされていた（年報1983）。ところが、政庁近くの第50次調査では、路幅が18mの時期の道路側溝が存在しなかったことから第43・44次調査の結果を再検討し、政庁第Ⅰ・Ⅱ期は路幅13m程度で、政庁第Ⅲ期に路幅が約23mに拡幅され、政庁第Ⅳ期まで維持されたと見解が修正された（年報1987）。一方、多賀城外では8世紀末頃に路幅19mの道路跡が確認されたことから、政庁～南門間の道路跡の変遷を再確認することを目的として今回の調査を実施した。しかし、道路跡の盛土が全く失われており、この点については再検討できなかった。周辺地域の調査が予定されており、今後の課題としたい。

#### 【S X2778 道路跡】

S X2785道路跡の西半部を削平していることや、第46次調査で、浅い溝の底面に瓦や小石が敷き詰められた、外郭西門廃絶後の通路が検出されていることから（年報1985）、本道路跡もS X2785道路跡廃絶後の可能性が高いと思われる。

#### B掘立柱建物跡

##### 【S B2776 掘立柱建物跡】

これらの柱穴は大規模で掘方もしっかりとしていることや、政庁中軸線と方向が一致しその近くに存在することから、多賀城に関わるものとみて間違はないと思われる。そして、北側が未調査のため検討の余地を残すものの、柱間が11尺程度あることや東から1間目の建物内部にも柱穴が存在すること、政庁～外郭南門間の道路面のほぼ中央に存在することなどから、この建物跡は門跡と推定できる。以下では門跡と仮定して検討する。

検出した柱穴を政庁中軸線に対称に折り返すと、東西棟の八脚門に復元できる。この門跡は、政庁南門の南およそ192mにあり、外郭南門の北およそ122mにある（註4）。

年代について検討してみる。政庁第Ⅲ・Ⅳ期のS X2785道路跡と同時に存在したとすると、門跡の東妻と道路の東側溝まではおよそ6mあり、この部分には何らかの遮蔽施設が必要であったと思われる。道路跡の東側溝西側には廃絶時の路面が残っていたが、施設の痕跡は検出されなかつた。したがって、門跡と政庁第Ⅲ・Ⅳ期のS X2785道路跡は同時に存在したものではなく、門跡は政庁第Ⅱ期以前のものと思われる。

また、この門跡は、後述のように政庁第Ⅱ期以前のS B2777掘立柱建物跡と同時に存在し、計画的に配置された可能性があることから、同様に政庁第Ⅱ期以前と推定できる。

一方、S B2776は掘立式の門跡である。政庁の主要建物は第Ⅰ期が掘立式で、第Ⅱ期以降は礎石式である（政庁跡本文編1983）。また、外郭南門は政庁第Ⅰ期では柱穴が検出されており、政庁第Ⅱ期以降は礎石式の八脚門と推定されている（年報1985）。

こういった状況から、この門跡は政府第Ⅰ期のものと考えられる。

#### 【S B2777 挖立柱建物跡】

年代は、城前地区官衙A期と思われるS K2754 土墳や、B1期のS I 2765 壇穴住居跡よりも古いくことから、政府第Ⅱ期以前と考えられる。また、建物跡の方向がS B2776 門跡と同じことや、後述のようにこれらの配置に計画性が窺えることから、2棟は同時期に存在した可能性が考えられるその場合、この建物跡の時期は政府第Ⅰ期となる(註5)。

S B2776 門跡との位置関係をみると、S B2776 の棟通りと本建物跡の北妻との距離はおよそ9mであり、S B2776 東妻と本建物跡の棟通りとの距離はおよそ6mである。したがって、両者は計画的に配置されたものと考えられる(註6)。

#### 【S B2755 挖立柱建物跡】

城前地区的官衙が存在する丘陵上にあり、城前地区的多くの建物跡と同様に壙跡を伴うことから、官衙を構成する建物跡と思われる。城前地区官衙B1期と考えられるS X2762 炭化物層より新しいことから、城前地区官衙B2期のものと思われる。部分的な検出であり、詳細な検討は次年度以降に予定されている周辺地域の調査を待つて行いたい。

### C 墳跡

S A2763 は材木塙であり、S A2772 は一本柱列による塙跡である。両者ともほぼ同じ場所にあり、新旧は不明なものと連続して存在した区画施設と思われる。

ところで、S A2763 墳跡はS B2777 挖立柱建物跡の北妻まで延びており、建物跡の東側柱列の延長上にある。こういった状況から、S A2763 墳跡はS B2777 建物跡に取り付いていたとも可能であろう(註7)。位置は東へ寄るもの、S A2772 墳跡についても同様にみられよう。

他方、これらがS 258 付近で途切れていることは、この部分に門に取り付く東西に延びる区画施設があった可能性を示唆しているとも考えられる(註8)。

### D 壇穴住居跡

いずれも城前地区的丘陵の南端部に位置し、北辺にカマドが付けられ、主柱穴は存在しない。S I 2765・2766 壇穴住居跡には屋外への排水溝があり、SI2478 壇穴住居跡には東辺に丸瓦を用いた周溝があり、排水のためと思われる。以上のように、これら3棟には共通点が多い。

3棟とも8世紀末葉～9世紀前半頃の遺物が出土しており、城前地区官衙B1期もしくはB2期のものと考えられる。城前地区官衙のB2期は整然とした配置の格の高い官衙であり、壇穴住居が官衙の内部や近くに存在することは考えにくい。また、政府～外郭南門間道路のすぐそばに壇穴住居が存在することも想定しがたい。したがって、これらは城前地区官衙B1期のものと考えられる。

## Eその他

### 【SK2754 土壇】

城前地区官衙のB1期のS I 2765・2766 堅穴住居跡が堆積土の途中から掘り込まれていることから、城前地区官衙のA期もしくはそれ以前のものと考えられる。また、政庁第I期の可能性があるS B2777 挖立柱建物跡と近接し、S A2772 塀跡を壊していることを考えると、この土壇の年代は城前地区官衙のA期の可能性が高いと思われる。一方、堆積土の出土遺物は9世紀後半頃までのもので、最上部に灰白色火山灰が堆積していたことから、10世紀前葉頃までに埋没したと考えられる。

### 【SK2786 土壇】

8世紀前葉～後半頃の遺物を含むS K2486 土壇より古いことから、城前地区官衙のA期もしくはそれ以前のものと考えられる。

### 【SX2769 段跡】

E24からE30まで東西に延びており、さらに延びる可能性がある。南側の削り出された面は、凹凸はないものの地形なりに傾斜しており、平坦面を造成するための削り出しとは考えにくい。段が何らかの施設に伴って形成されたとすれば、それは段の北側に存在したと思われる。

### 【SX2787 平場跡】

斜面を削り出して平坦面を造成したもので、関連するとみられる柱穴が小規模なため、多賀城廃絶後のものと考えられる。

### 【SX2762 炭化物層】

遺物の年代が8世紀末葉から9世紀前半頃で、城前地区官衙A期の火災に由来すると思われる焼土や炭化物が多く含まれていることから、城前地区官衙B1期の堆積と思われる。

調査区内でのこれらの変遷を簡単にまとめると以下の通りである。

#### i 政庁第1期

政庁中軸線上に政庁～南門間を結ぶ路幅13mの道路がある。一路面中央には門（S B2776）があり、南東にはS B2777 挖立柱建物が配置されている。

門の東側にはこの時期に属する明瞭な遺構は検出されていない。

#### ii 政庁第Ⅲ期

政庁第I期と同様に、政庁中軸線上に政庁～南門間を結ぶ路幅13mの道路がある。東側の丘陵上には官衙が成立し、S K2486 土壇の底面で柱穴が検出されていることから、本調査区付近にもこの時期の掘立柱建物が存在したと思われる。また、丘陵南端部にはS K2754 土壇が掘られる。

#### iii 政庁Ⅲ-1期

火災後の暫定的な期間で、政庁中軸線上に政庁～南門間を結ぶ路幅13mの道路があり、丘陵南端部には堅穴住居（S I 2478・2765・2766）が造られる。

#### iv 政府皿-2期（城前地区官衙B2期）

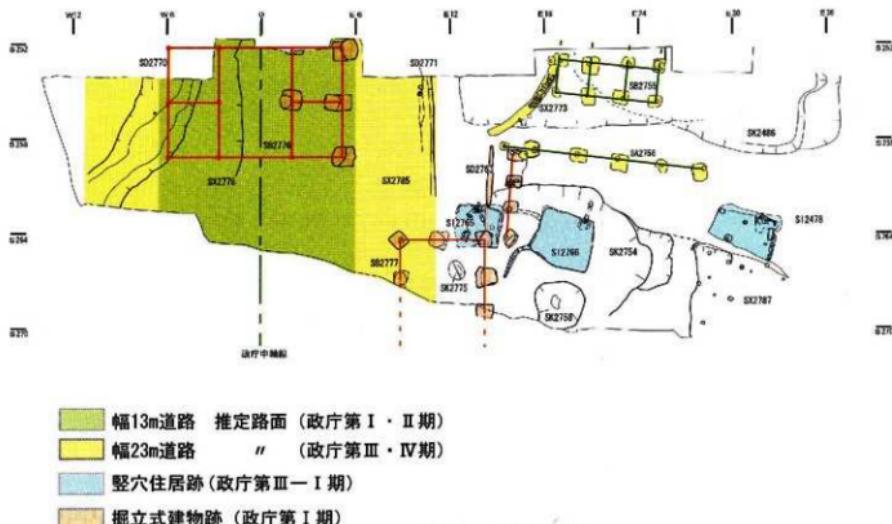
政府中軸線上の道路が幅23mに拡幅される。東側には城前地区官衙の建物（S B2755）と塀（S A2756）が造られる。

#### v 政府第IV期

幅23mの道路が維持されている。城前地区の官衙には数棟の建物が存在するが、整然とした配置とはなっていない。本調査区にはこの時期の建物等は存在しない。

#### vi 多賀城廃絶後

廃絶後の遺構を一括した。従来の道路の西半分を削平して、通路部分にパラスを敷き詰めた道路（S X2778）や平場（S X2787）などがある。



第14図 遺構辺縁

## 5. まとめ

1. 第74次調査は多賀城市市川字城前の丘陵南端部を対象として実施した。
2. 調査は政庁～南門間の道路の再検討を目的として実施し、政庁第Ⅲ期以降の道路跡の東側溝
3. 一方、道路上では門と推定されるSB2776 堀立柱建物跡が発見され、政庁第Ⅰ期のものの可能性が考えられた。また、SB2777 堀立柱建物跡は門と同時期で、計画的に設置されたとみられる。
4. 本調査区では、政庁第Ⅱ期以降は、西側が政庁～南門間の道路、東側が城前地区の官衙の一部として機能していたことが明らかになった。
5. 多賀城廃絶後にも新たな道路が建設・維持されており、城内もしくは周辺に有力者が存在したと思われる。
6. 新たに発見された門とみられる建物跡は従来想定されておらず、多賀城を理解する上で重大な発見である。門の当否を始め、取り付く区画施設の有無、時期の確定などは今後の課題であり、早急に周辺の調査を実施して解明する必要がある。

註1 年代や生産地等については専修大学の亀井明徳氏にご教示を得た。記して感謝申し上げます。

註2 註1と同じ

註3 政府正殿の南入側柱列の中央と政庁南門の中央を結んだ線であり、南北方向の発掘基準線でもある。ただし、この中軸線は政庁第Ⅲ期のものであり、政庁第Ⅰ・Ⅱ期の政庁南門はⅢ期の南門よりも幾分西に位置することから、政庁第Ⅰ・Ⅱ期の中軸線も西へ寄ることになる。

註4 政府正殿の南入側柱列と政庁南門の棟通りの間はおよそ64mあり、政庁南門とSB2776 堀立柱建物跡との距離192mは正殿～政庁南門間のちょうど3倍である。

註5 SB2777 の年代を政庁第Ⅰ期とすると、この南側の第44次調査で道路の暗渠裏込めと暗渠埋土から出土した政庁第Ⅰ期の多量の木簡や削り屑との関係が問題となる。これらのうち、暗渠埋土出土の木簡については付近に排出元があると推定されており（年報1983）、位置的にみて、SB2777 が排出元であった可能性も考えられる。しかし、暗渠埋土出土の木簡や削り屑は暗渠裏込めに含まれていた木簡などが流れ込んだ可能性もあり、排出元については慎重な検討が必要である。

註6 門を中心とした東西に建物を配した可能性も考えられるが、SB2777 の対称の位置は宅地や道路となっており、発掘調査ができなかった。

註7 材木塀が建物の柱に直接取り付く例としては、加美町壇の越遺跡29S区の例がある（旧宮崎町教育委員会調査、未報告）。本例では、SA2763 塀跡がSB2777 堀立柱建物跡の柱抜取り穴によって續されており、取り付くかどうかは確認できなかった。

註8 門に取り付く区画施設がどこまで延びていたかは不明であるが、外郭東辺まで延びていたと

仮定した場合、これに関連する可能性のある遺構が検出されている。

第38次調査ではS X1261 基礎地業とS A1260 材木列が検出されている(年報1981)。両者は一連のもので、東西に延びる区画施設であり、年代は9世紀後半以前である。

第41次調査では第1次整地層とその上に構築されたS X1339 積土造構が検出されている(年報1982)。S X1339は南北方向で、南端がわずかに西へ曲がっている。年代は8世紀末以前であり、区画施設もしくは道路の可能性が考えられている。

これらと今回検出した門はほぼ直線上に並んでおり、方向は外郭南辺築地と近い。

#### 引用・参考文献

- 宮城県多賀城跡調査研究所 1970『宮城県多賀城跡調査研究所年報1969』(第7次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1984『宮城県多賀城跡調査研究所年報1983』(第43・44次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1986『宮城県多賀城跡調査研究所年報1985』(第46・48次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1987『宮城県多賀城跡調査研究所年報1986』(第50次調査)
- 平川 南 1993『多賀城の創建年代』『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集国立歴史民俗博物館
- 高野芳宏・菅原弘樹 1997『第六章第五節古代都市多賀城』『多賀城市史1』多賀城市史編纂委員会
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2001『宮城県多賀城跡調査研究所年報2000』(第71次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2003『宮城県多賀城跡調査研究所年報2002』(第73次調査)

### III. 第 75 次調査

#### 1. 調査の目的

平成 15 年度は多賀城跡発掘調査第 7 次 5 カ年計画の最終年にあたり、当初の計画では、城外南北大路跡とその東側の状況把握を目的として、外郭南門南側の丘陵上(旧幕田家)を対象に調査を実施する予定であった。しかし、調査予定地の公有化が諸般の事情により完了せず、政府～南門間でまとまつた調査区を確保することも難しいことから、調査計画の見直しをおこなった。その結果、第 75 次調査として、これまで未確認である外郭北門の発見を目的として、六月坂地区で外郭北辺の調査をおこなうこととした。

第 75 次調査区は、政府跡の北北西約 600m に位置する多賀城市市川字六月坂 24 番地に所在する。この地点は、六月坂地区を対象に実施した第 12・18 次調査の遺構分布の検討から推定された「城内北部南北大路」の延長上にあたることと、北辺のほぼ中央で築地塀跡の高まりが、現地形では約 30m にわたって途切れず平坦地となっていること、などから、外郭北門跡が所在する可能性が高いと指摘された場所である(岡田: 2002)。

#### 2. 調査の経過

第 75 次調査は、調査対象地がスギ林の中にあったため、調査に先立って進入路と調査対象地内の立木約 150 本の伐採をおこなった。ただし、調査対象地内の築地塀上にあったモミの巨木 2 本については、緑地保全のため残した。8 月 1 日から調査区のグリッド設定をおこない、バックホウによる表土除去作業を開始した。調査の結果、調査開始前に現況では途切れているように見えた北辺築地塀が、表土下に埋没して連続していることを確認した。このため、当初期待した門は、この場所にないことが明らかになった。しかし、築地塀の残存状況が良く、築地塀の構造と変遷について検討することができた。また、築地塀基壇に積み石を発見し、新たな知見を得ることができた。この間、9 月 12 日には多賀城跡調査研究現地指導委員会による現地指導を受けた。その後、補足的な調査をおこない 11 月 14 日には調査を終了した。調査の記録は、1/20 の遺構平面図、断面図を作成し、35mm スライド写真撮影による保存を行った。これらと並行して、電子平板によるデジタルデータでの測量作業とデジタルカメラでの写真撮影も行った。

これらの調査成果について、11 月 7 日に報道機関に公表し、11 月 8 日に現地説明会を行い、約 150 名の参加があった。また、12 月 20 日の平成 15 年度宮城県遺跡調査成果発表会と、2 月 28 日の第 30 回古代城柵官衙遺跡検討会で概要を報告した。

### 3. 調査成果

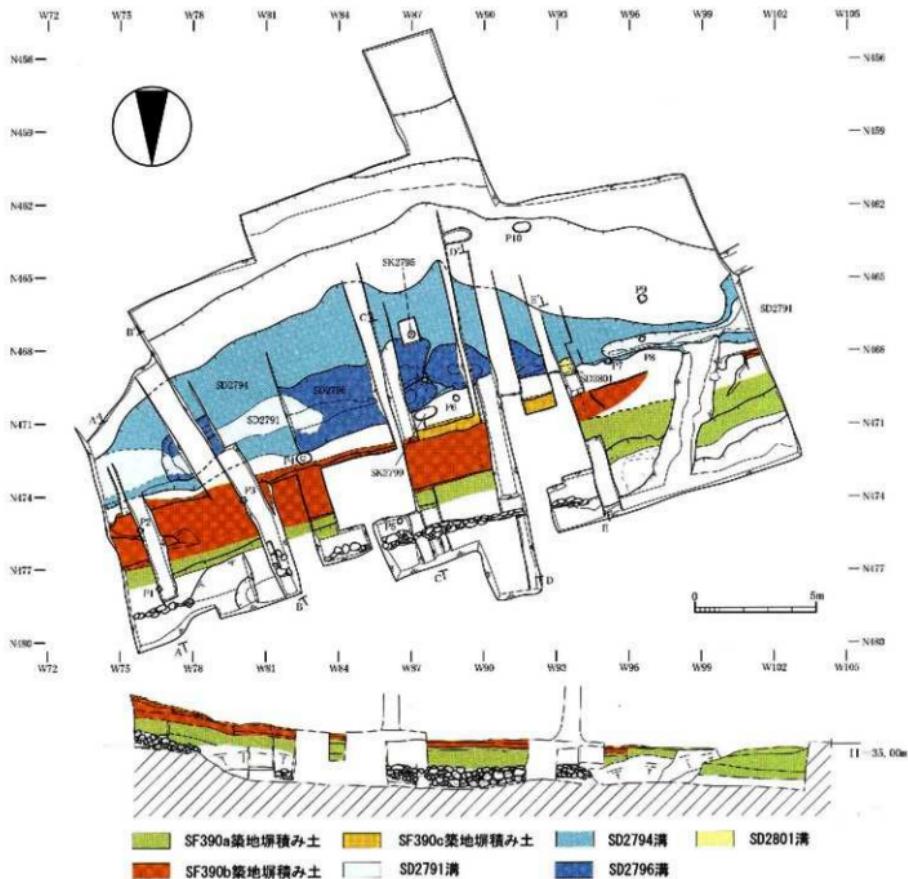
第75次調査区は政府跡の北北西約500mの外郭北辺に位置する。地形的には多賀城政府跡の立地する標高50m前後の丘陵北縁部にあり、丘陵北側に水をたたえる加瀬沼に臨んでいる。なお、加瀬沼は江戸時代に開削された人工池で、中世以前は低湿地であったとみられる。調査対象地は、標高40m前後の丘陵北側斜面に立地し、斜面を南に上がった南方の丘陵上には平安時代の官衙施設が発見された六月坂地区が広がっている。



第15図 六月坂地区平面図 (S=1/2000)

## (1) 地形と層序

調査対象地内では、北辺築地塀跡周辺に崩壊土層が分布しその南側では溝内堆積層がある。調査の結果、築地塀下に築地塀構築以前の旧表土層が残っていることが確認されたが、他の急傾斜面部分は基本的に表土下が凝灰岩の風化した漸移層、もしくは岩盤となっていて古代以降の堆積層は発達していない。岩盤上面は北に傾斜していて、大半は基盤の凝灰岩およびアルコース砂岩の残留巨礫が現表土により直接覆われている。



第 16 図 第 75 次調査区平面図・立面図

## (2) 発見した遺構と遺物

第75次調査区は外郭北辺に沿う東西に細長い調査区で、調査の結果、北辺築地塀跡を約30mにわたり検出した。ただし、立木保存のため途中2カ所に、幅5mずつの未調査箇所を残した。

出土遺物は、整理用平箱で合計12箱分出土した。瓦類が5箱、土師器・須恵器・陶磁器類は4箱、鉄さい・金属製品が3箱である。築地塀跡周辺の表土からの出土遺物が大半で、土師器・須恵器・須恵系土器・近世陶器・丸瓦・平瓦の破片がある。

### 【S F 390 築地塀跡】

築地塀跡を平面的に精査した結果、複数の改修や補修の痕跡を確認した。このため、築地塀跡を5箇所で断ち割り、断面の観察をした。その結果、築地塀跡にはa～cの3時期の変遷がみとめられ、a築地塀の改修後b、c築地塀は南に1mずれた位置に構築されていること、築地塀の規模・方向に大きな変化はないことなどがわかった。

### 【S F 390a 築地塀】

【基礎地業】築地塀造成以前の調査対象地の旧地形は、W95付近から東側が北から入り込む浅い沢地で、西側は尾根状の微高地となっていた。調査の結果、築地塀構築にあたって、西側の微高地を削り、東側の沢地を埋め、丘陵斜面全体を北側に削り出して南北幅が約8mの平坦地を造成し、その北縁部に築地塀を築成していることがわかった。

【基 壇】基礎地業により造成した平坦面の北縁に上幅約4mの築地塀基壇を作っている。基壇の造作方法はW95付近を境に東西で異なり、西側の微高地部では岩盤を削り出したものであるが、東側の沢地部分では、凝灰岩片を多量に含む黄褐色土を盛土したもので、その北面には人頭大の石をほぼ垂直に3～4段、高さにして約1m積み上げて土留めとしている。石壇の使用石材は基盤の凝灰岩中に包摂される礫と同質の自然石で、切石・削り石などの加工石材はみられない。石壇は現状では2カ所で大きく崩壊しているが、当初は盛土による基壇の北面全面に積まれていたと推定される。

【排 水 溝】基壇南縁には上幅約50～100cm、深さ50cmのSD2801溝を基壇南縁に並行して掘り込んでいる。西に行くほど深く岩盤を掘り込んでいる。築地塀南側に雨水が溜まるのを防ぎ、西側の沢に流し落とすための排水溝とみられる。堆積土はa築地塀崩壊土である。

【積 み 土】基壇上のほぼ中央に基底幅約1.9mのa築地塀を版築したものである。南北の壁はほぼ垂直に立ち上がる。残存高は南半が1m前後、北半が50cm前後までそれぞれ削平されている。積み土は凝灰岩片を多量に含む黄褐色土と褐色土をほぼ水平に厚さ5～10cmの単位で版築したもので締りがあり硬い。版築の積み手の違いはW90付近で1箇所確認した。

【犬 走】a築地塀の両側に幅1m前後の平坦面がある。

【柱 穴】築地塀北側で2個(P1・5)、南側で2個(P2・P3)の柱穴を確認した。いずれも径25cm前後、深さ40cm前後で柱は抜き取られている。これらは基壇上面を掘り込み面とし、築地塀本体から10～20cm離れた位置にあることから版築の際に仮板を押された添柱の痕跡とみられる。

【崩壊土層】a築地塀の南側裾部にだけ築地塀崩壊土層が堆積している。厚さ10～40cmの締りのない黄褐色土層である。S F 390a築地塀の北側に崩壊土層がみられないのは、北側の犬走や基壇石壇を維持するために崩壊土を除去したためとみられる。

【出土遺物】a築地塀基壇築成土、積み土、崩壊土からの出土遺物はない。

### 【S F 390 b 築地壙】

【基礎地業】改修にあたって、a 築地壙積み土の南半を高さ約 1m まで、北半を高さ約 50cm までそれぞれ平らに削り取っている。削り残した南半を b 築地壙基底部とし、北半を b 築地壙基壇としている。

【基 壇】b 築地壙基壇は、a 築地壙基壇上に新たに築成し直したものである。改修後の基壇は、上幅が約 4m と從前とほぼ同規模であるが、高さは約 50cm 嵩上げされ、位置的には南（内側）に約 1m 移動している。その南半は a 築地壙基壇上に嵩上げしたものであるが、北半は a 築地壙の北半を高さ約 50cm まで削り取って整形したものである。すなわち、南半の基壇築成土は、a 築地壙の崩壊土層上に新たに積んだ褐色土であるが、北半は a 築地壙の積み土である。

【積み土】基壇上のほぼ中央に基底幅約 2.1m の b 築地壙を版築したものである。築地壙北側の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南側の壁は崩壊し、なだらかである。築地の残存高は基壇上面から 50cm 前後である。積み土は、基壇築成土と同様に南半は新たに版築し、北半は削り残した a 築地壙をそのまま利用したものである。したがって改修後の b 築地壙の位置は a 築地壙より南に 1m 移動したことになる。積み土は凝灰岩片を多量に含む黄褐色土と褐色土をほぼ水平に厚さ 5~10cm の単位で版築したもので締りがあり硬い。版築の積み手の違いは W86・95 の 2 箇所で確認した。間隔は約 9m である。

【犬 走】b 築地壙北側には、a 築地壙を削り出した幅約 1m の平坦面と、約 50cm の落差のある当初の基壇上面の平坦面と、あわせて 2 段の平坦面が維持されていたとみられる。築地壙南側にも幅約 1m の平坦面がある。

【崩壊土層】b 築地壙の崩壊土層は、築地壙北側ではほぼ垂直に立ち上がる壙の裾部に堆積しているが、築地南側では壁の崩壊が進み、なだらかになった犬走上ほぼ全域に堆積している。この南北両側の崩壊土がある程度堆積した段階で、犬走のほぼ全面が厚さ 2cm 前後の焼土・炭化物層で覆われている。炭化物層には板状の炭化材が多く含まれ、築地壙に帶状に厚く分布し築地から遠ざかるにつれ薄くなる。これら焼土・炭化物層の上にはさらに築地壙崩壊土が堆積しており、とくに築地壙北側はこの段階で基壇の石垣が崩壊土層下に埋没したとみられる。

【出土遺物】b 築地壙基壇築成土、積み土、崩壊土からの出土遺物はない。

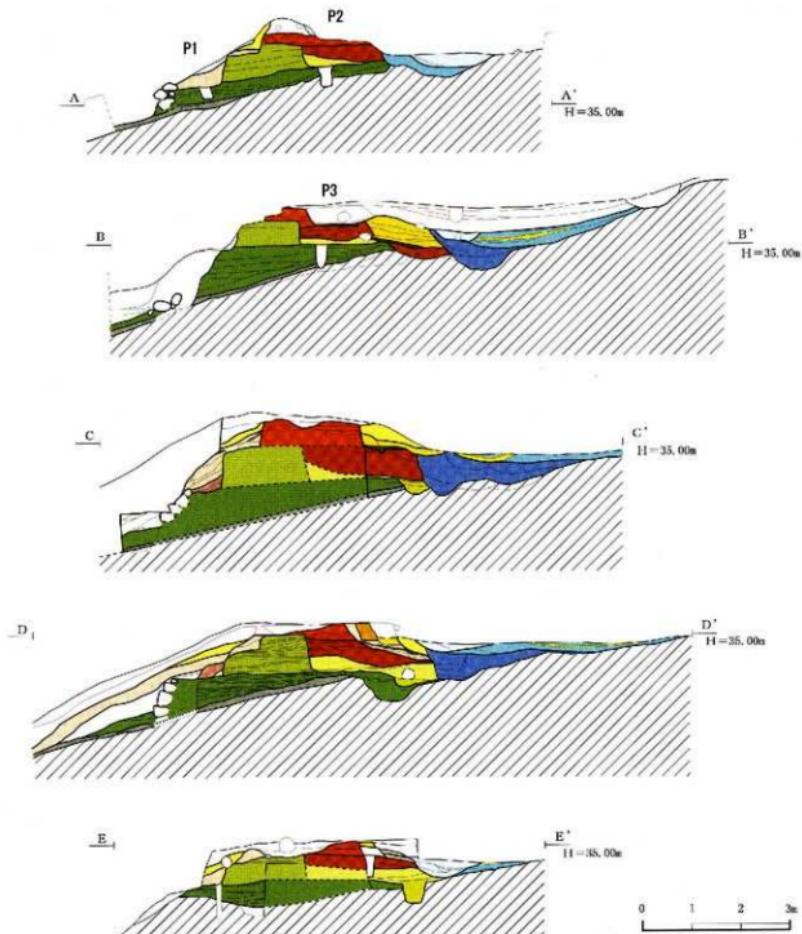
### 【S F 390 C 築地壙】

【積み土】b 築地壙南側基底部は崩壊が著しい。c 築地壙は、この築地壙南側基底部に補修を加えたもので、補修痕跡は W87~93 の 6m の間で確認した。工法は、b 築地壙南側基底部を奥行き 30cm まで削り、そこに土を補ったものである。用土は凝灰岩片を多量に含む締まりのない赤褐色土である。

【犬 走】築地壙の補修に伴い W87~93 の南側を整地し嵩上げしている。嵩上げの整地層は幅 1m 前後、厚さ 20cm 前後の褐色土層である。補修で付加した積み土部分に寄せるように整地したものである。一方、築地壙の北側に明瞭な平坦面はみられない。

【崩壊土層】c 築地壙の崩壊土層は、築地壙南北両側に堆積している。この段階で築地壙北側の基壇の石垣は崩壊土層に埋没していたとみられる。

【出土遺物】c 築地壙北側崩壊土層から瓦と土器の破片が出土している。瓦は丸瓦、平瓦がある。丸瓦は II・II B 類（第 19 図 1・2）、平瓦は II B・C 類がある。出土状態に規則性はなく、築地壙に使用されていたものではないと考えられる。土器は、須恵器壺（第 19 図 3）・縁袖陶器（第 19 図 4）がある。



a基盤整地	a築地堆積土	a崩壊土	旧表土
b基礎整地	b築地堆積土	b嵩上げ整地	b崩壊土
c築地堆積土	c嵩上げ整地	c崩壊土	焼土・炭化物層
SD2791	SD2794	SD2796	SD2801
			灰白色火山灰

第17図 S X 390 築地壠・断面図

### 【SK2799 土壌】

W88・N471 の築地塀南側大走上に位置する。S F 390c 築地塀崩壊土層上面で検出した。平面形は長軸 80cm 短軸 30cm の梢円形、深さ約 15cm の土壌である。内部には炭化物、焼土粒を含む褐色土が堆積している。土師器壺(第 19 図 5)が出土している。

### 【SK2795 土壌】

W87・N467 の築地塀南側 4m に位置する。S D 2794 溝内の灰白色火山灰下の褐色土層上面で検出した。平面形は径 30cm の円形、深さ約 15cm の浅い土壌である。底面から壁面にかけて火を受け、黒色もしくは赤褐色に変色している。内部には炭化物、焼土粒を含む褐色土が堆積している。周辺から鉄さい、鍛造剥片が出土していることから小鍛冶遺構と考えられる。

### 【SD 2791 溝】

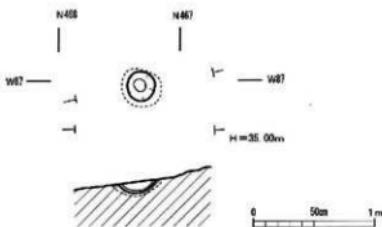
築地塀の南側約 2m で、幅 1~2m、深さ 30cm 前後の S D 2791 溝を検出した。この溝は S F 390 築地塀とほぼ並行して東西に延びる。S D 2794 溝と重複し、これより新しい。堆積土は炭化物を含む褐色土である。堆積土から瓦と土器、硯などが出土している。瓦は丸瓦、平瓦がある。丸瓦は II・II B 類、平瓦は II B・C 類があるがいずれも小破片で出土状態に規則性はない。土器は、須恵系土器壺(第 19 図 6~8)円面硯(第 19 図 9)が出土している。

### 【SD 2794 溝】

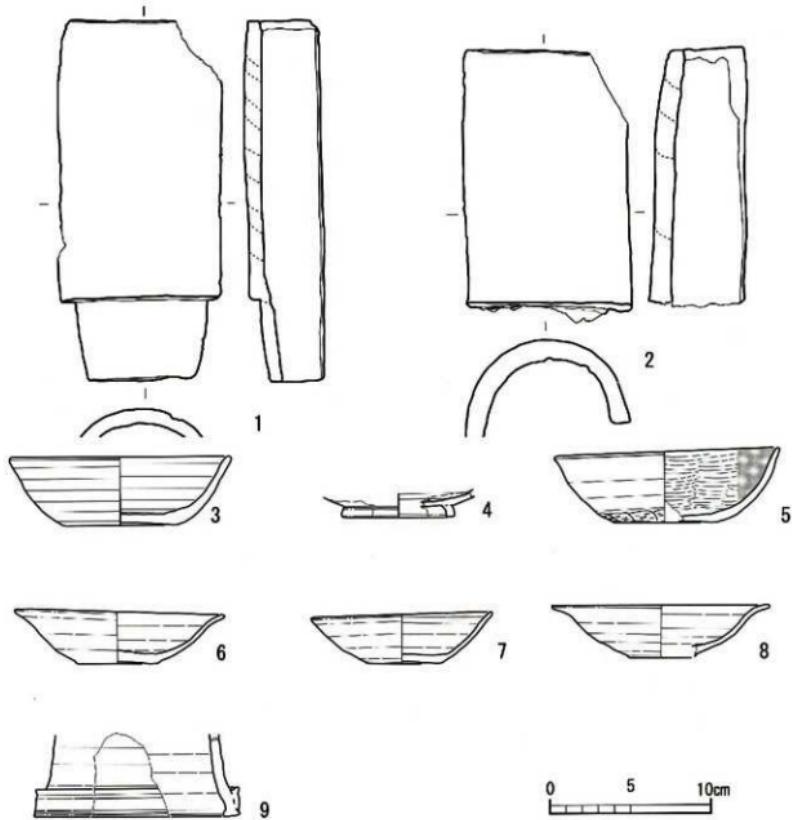
築地塀の南側約 1m で、幅 1~6m、深さ 30~50cm の S D 2794 溝を検出した。この溝は S F 390 築地塀とほぼ並行して東西に延びている。S D 2791 溝と重複し、これより古い。堆積土は炭化物を含む自然堆積の褐色土層で層の中位に厚さ 10cm ほどの灰白色火山灰層が堆積している。堆積土から瓦と土器、硯などが出土している。瓦は丸瓦、平瓦がある。丸瓦は II・II B 類、平瓦は II B・C 類があるがいずれも小破片で出土状態に規則性はない。土器は、土師器壺(第 20 図 1・2)、土師器壘(3)、土師器甕(7・第 21 図 9)、須恵器壺(第 20 図 4)須恵器高台壺(5)、須恵器高壺(6)、須恵器瓶(第 21 図 10)円面硯(第 20 図 8)がある。

### 【SD 2796 溝】

W78~93 の築地塀南側で、幅 1~3m、深さ約 50~100cm の S D 2796 溝を検出した。この溝は不整形であるが S F 390 築地塀とほぼ並行して東西に延びる。S D 2794 溝と重複し、これより古い。この溝は凝灰岩片を多量に含む黄褐色土で一気に埋め戻されていることから、築地塀の補修に伴う土取りを目的とした溝とみられる。遺物は出土していない。

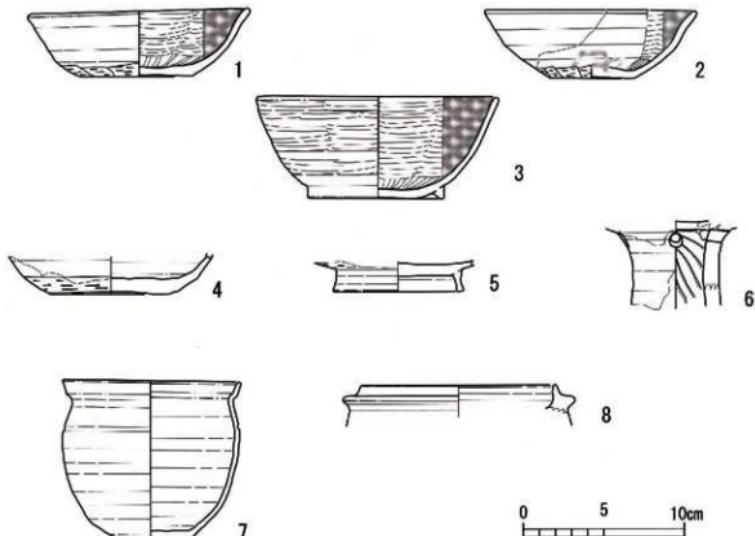


第 18 図 SK2795 小鍛冶遺構



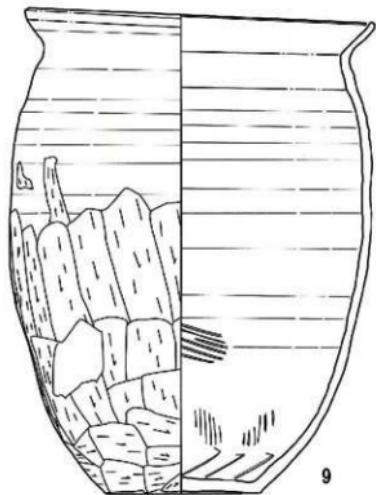
No.	種類	出土地點	特徴	登録	番号
1	丸瓦II B種	SF390 塚地削崩土	【外側】ロクロ。全長36.5cm、最大幅17cm、玉縁長8cm、玉縁幅13cm。	SF390-R1	14023
2	丸瓦II B種	SF390 塚地削崩土	【外側】ロクロ。残存長27.5cm、最大幅17cm、玉縁幅13cm。	SF390-R2	14023
3	須恵器坏	SF390 塚地削崩土	【底部】回転糸切り。口径13.9cm、底径7.0cm、器高4.2cm、完形。	SF390-R3	14023
4	縦袖陶器 檻	SF390 塚地削崩土	底部のみの破片。【体部下端～底部】回転ヘラ削り再調整。切り離し不明。 底径(7.0)cm、残存1/2。	SF390-R5	14023
5	土師器 坏	SK2799 土壇	【底部】回転糸切り無調整。【体部下端】手持ちヘラ削り再調整。 【内面】ヘリミガキ一黑色処理。口径14.0cm、底径6.3cm、器高46cm、完形。	SK2799-R1	14023
6	須恵系土器 坏	SD2791 溝	【底部】回転糸切り。口径13.0cm、底径5.0cm、器高3.4cm、完形。	SD2791-R1	14023
7	須恵系土器 坏	SD2791 溝	【底部】回転糸切り。口縁部にタール状付着物、灯明皿の灯心とみられる。 口径11.2cm、底径4.6cm、器高3.2cm、完形。	SD2791-R2	14023
8	須恵系土器 坏	SD2791 溝	【底部】回転糸切り。口径(13.6)cm、底径(4.2)cm、器高3.3cm、残存3/5。	SD2791-R3	14023
9	須恵器 円面磯	SD2791 溝	脚部のみの破片。口縁端部は帯状、底径(12.8)cm、残存1/5。	SD2791-R4	14023

第19図 SD2791溝他 出土遺物



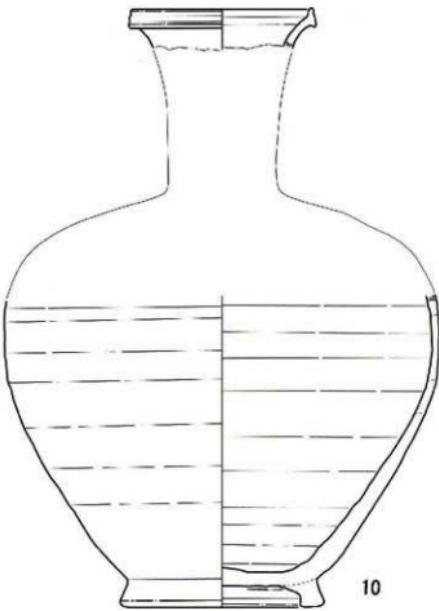
No.	種類	出土地点	特徴	登録	箱番号
1	土師器 壺	SD2794 溝	〔底部下端～底部〕手持ちヘラケズリ削り再調整。切り離し不明。 〔内面〕放射状ヘラミガキ—黒色処理。口径 13.8cm、底径 6.8cm、器高 4.2cm。完形。	SD2794-R2	14022
2	土師器 壺	SD2794 溝	〔底部下端～底部〕手持ちヘラ削り再調整。切り離し不明。	SD2794-R3	14022
3	土師器 梵	SD2794 溝	〔底部〕回転系切り。〔内面〕放射状ヘラミガキ—黒色処理。 口径 15.0cm、底径 8.0cm、器高 6.3cm。完形。	SD2794-R1	14022
4	須恵器 杯	SD2794 溝	体下部のみの破片。〔体部下端～底部〕回転ヘラ削り再調整。切り離し不明。 底径 7.4cm。	SD2794-R4	14022
5	須恵器 高台壺	SD2794 溝	底部のみの破片。〔体部下端～底部〕回転ヘラ削り再調整。切り離し不明。底径 8.1cm。	SD2794-R5	14022
6	須恵器 高壺	SD2794 溝	脚部のみの破片。〔脚部〕中空。外面クロナナゲ調整。内面しごり目。 脚上端に 2 対の貫通孔。	SD2794-R8	14022
7	土師器 裏	SD2794 溝	〔底部〕回転系切り。〔内外面〕クロナナゲ調整。体部下半部手持ちヘラ削り。 口径 11.0cm、底径 4.5cm、器高 9.9cm。完形。	SD2794-R7	14022
8	須恵器 円面環	SD2794 溝	口縁部のみの破片。口径 (12.0) cm。	SD2794-R6	14022

第 20 図 SD2794 溝 出土遺物 (1)



9

0 5 10cm



10

No.	種類	出土地点	特徴	登録	箱番号
9	土師器 壺	SD2794溝	[底部]ナゲ。[内外面]ロクロナデ調整。口径 22.5cm、底径 9.7cm、器高 30.8cm。完形。	SD2794-R10	14022
10	須恵器 壺	SD2794溝	底部と口縁部の破片。同一個体とみられるが接合しない。体部に自然和の軸重ね。 口径(11.5)、底径(13.0)cm。	SD2794-R9	14022

第21図 SD2794溝 出土遺物 (2)

## 4. 考察

第 75 次調査区で発見した遺構について年代と変遷を整理し、とくに北辺築地塀跡については従来の調査成果と比較して、その構造や変遷における問題点を検討しておきたい。

### (1) 遺構の年代と変遷

第 75 次調査区で発見した遺構は北辺築地塀跡 1、土墳 1、小鍛冶遺構 1、溝 3 である。

このうち、S F 390c 築地塀北側崩壊土、S K2799 土墳、S D2794・2791 溝から遺物が出土している。S F 390c 築地塀北側崩壊土出土遺物は土器・瓦類で、多賀城政庁遺構期第 I ~ IV 期の各時期の遺物が含まれる。S K2799 土墳からは底部回転糸切で手持ちヘラ削り再調整のある土師器坏が 1 点出土しており、その特徴から 9 世紀前半頃の年代が想定される。S D2794 溝出土遺物は土器・円面硯・瓦類で、底部回転糸切で手持ちヘラ削り再調整のある土師器坏、断面三角形の低い高台の付く高台境などがあり、須恵系土器坏破片もわずかながら含まれることから 9 世紀前半~10 世紀前半の年代幅が想定される。S D2791 溝出土遺物は土器・円面硯・瓦類で、須恵系土器坏が多いことから 10 世紀中頃の年代が想定される。

次に、遺構の重複関係については、3 時期の変遷がとらえられる築地塀跡を軸に、その他の遺構や堆積層を加えて整理すると以下のようになる。

重複関係	出土遺物の年代
旧表土	
S F 390a 築地塀	
↓ 崩壊土 a	
嵩上げ整地	
S F 390b 築地塀	
↓ 崩壊土 b 1	
↓ 焼土・炭化物層	
崩壊土 b 2	
S K2799 土墳	9 世紀前半
S F 390c 築地塀	
S D2796 溝	
S K2795 土墳	
S D2794 溝 (灰白色火山灰を含む)	9 世紀前半~10 世紀前半
S D2791 溝	10 世紀中葉
S F 390c 築地塀以降の北側崩壊土	

## (2) S F 390 北辺築地塀の構造と変遷

今回の調査区内では、北辺築地塀は大きく3時期（S F 390a～c）の変遷をたどることを確認した。すなわち、築造当初のS F 390a 築地塀は構築後崩壊が進み、崩壊土がある程度堆積した時に大きな改修を受けている。改修にあたってはS F 390a 築地塀の上部を削り取り、残った基底部を利用して基壇を嵩上げし、南に1mほどずれた位置にほぼ同規模のS F 390b 築地塀を構築し直している。次に、改修後のS F 390b 築地塀も構築後に崩壊が進み、崩壊土が堆積する過程で火災の痕跡とみられる焼土・炭化物層が介在している。この焼土・炭化物層は、上層から掘り込まれたS K 2799 土壙に切られている。S K 2799 土壙は出土した土師器壺から9世紀前半代のものであることが確認されており、焼土・炭化物層の形成された時期は9世紀前半以前であり、西暦780年の伊公告麻呂事件による多賀城焼亡の痕跡である可能性が高いとみている。この焼土・炭化物層の上にさらに崩壊土が堆積した段階で築地塀の部分的な補修がおこなわれている。この補修後の築地塀がS F 390c 築地塀である。以上のような築地塀の規模・構造の変遷を整理すると以下のようになる。

### S F 390a 築地塀

- ① 北に下る傾斜地に立地している。
- ② 築地塀の構築に際して、築地塀内側の丘陵斜面を削り出している。
- ③ 上幅4mの基壇を削り出しと盛土によって築成し、盛土築成の北面に土留めの石垣を積んでいる。
- ④ 地塀は基底幅約1.9mで、両側に幅約1mの犬走の平坦面がある。
- ⑤ 築版築土は凝灰岩礫を多量に含む褐色土と黄褐色土を、厚さ5~10cm単位で互層に版築したものである。版築の積み手の違いを1箇所で確認した。
- ⑥ 版築時の仮枠板の添柱とみられる柱穴を4箇所で確認した。
- ⑦ 瓦の出土状況から、屋根は瓦葺ではなかったと推定される。
- ⑧ 構築年代は出土遺物が無いため特定できないが、S F 390b 築地塀との関係から政府遺構期の第II期以前とみられる。

### S F 390b 築地塀

- ① 基壇はS F 390a 築地塀基壇上の南に1mずれた位置に、上幅4mの基壇を嵩上げし構築している。
- ② 築地塀の規模は前段階とほぼ同様で、基底幅2.1mで、両側に幅約1mの犬走の平坦面がある。
- ③ 築地北半はS F 390a 築地塀下部を削り残し、南半は凝灰岩礫を多量に含む褐色土と黄褐色土を厚さ5~10cm単位で互層に版築したものである。版築の積み手の違いを2箇所で確認した。その間隔は約9mである。
- ④ 築地塀に伴う柱穴は確認していない。
- ⑤ 崩壊土の一部に火災によるとみられる焼土・炭化物層が含まれる。
- ⑥ 瓦の出土状況と炭化物層の状況から、屋根は瓦葺ではなかったと推定される。
- ⑦ 改修年代は出土遺物が無いため特定できないが、崩壊土中の焼土・炭化物層の年代推定に拠れば、政府遺構期の第且期と推定される。

## S F390c 築地塀

- ① F 390b 築地塀の南下部を削り、部分的に積み土を施して補修している。
- ② 築地塀の規模は前段階と同様、基底幅は約 2m と推定される。
- ③ 積み土は凝灰岩礫を多量に含む赤褐色土を築地塀南側基底部に補ったものである。積み手の違いを 1箇所で確認した。
- ④ 築地塀の南側平坦面を嵩上げしている。
- ⑤ 築地塀に伴う柱穴は確認していない。
- ⑥ 瓦の出土状況から、屋根は瓦葺ではなかったと推定される。
- ⑦ 年代は、S F 390b 築地塀崩壊土中の焼土・炭化物層の堆積以降であることから、政庁造構期の第Ⅲ期以降と推定する。

### (3) 北辺築地塀についてこれまでの調査成果との比較

多賀城の外郭北辺部についてはこれまで、第 17 次（1972 年）、第 49・51 次（1986 年）の 3 回の調査を実施している。第 17 次調査は多賀城外郭北辺の東西両隅の 2 カ所で S F 390 北辺築地塀の調査、第 49 次調査は北辺中央やや西よりで S F 390 北辺築地塀の調査をおこなっている。この他、第 51 次調査では多賀城跡北辺の東端を構成する S F 1681 築地塀の調査をおこなっている。S F 1681 築地塀は SF390 北辺築地塀の延長上にあって、SF300 東辺築地塀とその東側の SF380 東辺築地塀の間を結ぶ長さ約 100m の東西方向の築地塀である。各調査の成果を整理すると下表 3 のようになる。

年 代 (西側)	政庁造構期 事件等	第 17 次調査 (北辺西隅)	第 49 次調査 (北辺中央やや西)	第 51 次調査 (北辺ほほ中央)	第 17 次調査 (北辺東部)	第 51 次調査 (北辺東隅)
724	創建・・・・・					
750	I 期	SF390a 築地塀 基底幅：不明 基底幅：1.5m 積み手の違い：不明 柱穴：不明	SF390 築地塀 基底幅：約 4m 基底幅：1.85m 積み手の違い：3m 間隔 柱穴：嵌え柱	SF390a 築地塀 基底幅：約 4m 基底幅：2.0m 積み手の違い：5.8m 間隔 柱穴：嵌え柱	SF390a 築地塀 基底幅：約 4m 基底幅：2.0m 積み手の違い：不明 柱穴：有り	
762	(多賀城碑・修造)					
800	II 期 (哲麻呂攻撃)	SF390b 築地塀 基底幅：2.3m 積み手の違い：不明 柱穴：不明	S11802 整六穴切跡 第 4 層	SK2799 上塗 SF390c 築地塀 部分的修理 基底幅：約 4m 基底幅：2.0m 積み手の違い：不明 柱穴：不明	SF390b 築地塀 (崩壊土から存在を推定) SK2796 売	SF1681 築地塀 基底幅：なし 基底幅：1.94m 積み手の違い：6m 間隔 柱穴：潜え柱
850						
869	(貞観の地震)		SX1583 屋外カマド	SK2795 千脚治遺構 SK2794 売	SF390c 築地塀 (崩壊土から存在を推定)	
900	IV 期 戸白色火山灰降下・			SK2791 売		

第 3 表

北辺築地塀跡の調査成果

対応表

北辺築地塀に係わる今回の調査成果と、これまでの3次の調査成果を総合すると以下のようになる。

**立 地**：自然地形の上では、いずれも丘陵上部に立地する築地塀の調査である。ただし、第17次調査の北東隅はSF300 東辺築地塀に、北西両隅部はSF220 西辺築地塀にそれぞれ曲折する部分であり、これらの曲折部と、第49次もしくは今回の調査地点のような北辺の中間に位置する直線部分とで違いがある。また、第51次調査のSF1681 築地塀は、SF390 北辺築地塀の延長上にあるがSF300 東辺築地塀のさらに東にあってSF380 東辺築地塀に接続する長さ約100mの築地塀である。

**基 壇**：第17・49次調査および今回の調査地ではいずれも上幅約4mの基壇上に築地塀を構築している。第51次調査のSF1681 築地塀のみは基壇をもたず、地山上に構築したものである。第17・49次調査の基壇は主に地山を削り出して造成したものであるが、今回の調査地では旧表土上に盛土して築成した基壇で、その北側法面に土留め施設として石垣を積んでいる。

**基 底 幅**：築地の基底幅は、第17次調査の北東隅で2.4m、北西隅で1.5mと異なるが、第49・51・75次調査では1.85、1.94、2.00mと、1.9m前後の計測値を得ている。

**積み土**：いずれも凝灰岩礫を多量に含む褐色もしくは黄褐色土を、厚さ5~20cm単位で互層に版築したものである。版築の積み手の違いを確認しているのは第49・51・75次調査で、第49次では3もしくは6m間隔で8カ所、第51次では6m間隔で2カ所、今回の第75次調査では1カ所のみ確認している。

**柱 穴**：築地塀に伴う柱穴を、第17次調査北西隅部をのぞく各調査で検出している。検出した柱穴はいずれも築地塀本体から10cm前後離れた位置にあり、積み手の違い付近で対になっているものが多い。これらのことから、検出した柱穴は寄柱ではなく築地塀構築時の仮枠板を押された添柱の柱穴と推定している。

**屋根構造**：寄柱が確認できることと、築地塀周辺の各調査での瓦の出土量がいずれも少ないとから、北辺築地塀は一貫して瓦葺きではなかったと推定している。SF390b 築地塀については、崩壊土中の焼土・炭化物層に厚さ1~2cmの板状の炭化材が多いことから、板材を用いた屋根構造であったとみられる。

**構築年代**：第17・49次調査および今回のSF390 北辺築地塀については、いずれも構築当初の時期決定可能な遺物がなく、年代の特定はできていない。第51次調査のSF1681 築地塀については、政庁造構期第且期のSF380A 東辺築地塀崩壊土上に構築され、第III期のSF380B 東辺築地塀の構築よりは遅る時期のものであることを確認している。

**変遷**：SF390・SF1681 北辺築地塀についての明確な改修や補修の痕跡は、これまでの調査では検出されなかった。このため、北辺の築地塀は構築後、補修や修築がおこなわれないまま崩壊したと推定していた。しかし、今回の調査対象地でSF390 北辺築地塀に明瞭な改修・補修の痕跡を確認し、その南側に土取り溝とみられるSD2796・2794・2791溝を検出したことで、築地塀が8世紀から10世紀頃まで継続的に維持・管理されていたことが確認された。

## 5.まとめ

以上の築地塀の構造と変遷に係わる諸問題のうち、今回の調査で築地塀基壇・排水施設・変遷の3点について新たな知見が得られた。ここではこれらの知見について検討し、まとめとしたい。

### 築地塀基壇について

今回の調査により、外郭北辺築地塀は、幅4mの基壇中央に築成されていることが明らかになった。その施工方法は東西で異なり、西側では岩盤を削り出し、東側では盛土をし、その北面に土留めの石垣を積んでいることがわかった。築地塀基壇の土留め施設としては、外郭の東西南辺の低湿地部で「しがらみ」による土留め施設が確認されている。したがって、多賀城跡では、築地塀基壇の施工方法として、①地山削り出し、②盛土して石垣で土留め、③盛土して「しがらみ」で土留め、の三様がこれまで確認されたことになり、これらは地形・地質に応じて使い分けられたと考えられる。基壇の石垣は特殊な施設ではなく、盛土基壇が構築された場所では石垣が確認される可能性は高いと考えられる。

古代城柵の外郭施設で石を用いた施設としては、西日本の古代山城の石壘や石列が知られているが、東北地方では払田柵跡外郭南門の石壘を除き他に例をみない。今回発見された築地塀基壇の石垣を、西日本の古代山城の石壘や石列と比較した場合、古代山城では、主に土壘の基礎として構築し、加工した石材を積み上げ、もしくは並べているのに対し、多賀城跡では、築地塀基壇の土留めとして、自然石を乱石積みにしたものである。一方、払田柵跡外郭南門の石壘と比較した場合、払田柵跡では、一辺が1mを越える大きな石材に、控積みや裏込めの石を咬ませながら積み上げたもので、門の両側にのみ構築されていることから、視覚的に門の威厳を高める効果を期した施設と考えられるのに対し、SF390北辺築地塀基壇では人頭大ほどの小さな石材を基壇に貼り付けるように積んだもので、あくまでも土留めとしての機能を重視した施設と考えられる。このように、今回発見された築地塀基壇の石垣は、西日本古代山城の石壘や石列や払田柵跡外郭南門の石壘とは大きく異なるものである。

### 排水施設について

今回の調査区で検出されたSF390a北辺築地塀は、小さな沢地を内側に取り込んだ丘陵北斜面に立地する。このため築地塀内側がごく浅いながらも窪地状になり、丘陵上から流下した水が溜まりやすい地形を形成している。築地塀南側で検出された溝は、このような築地塀内側の排水施設として機能したとみられ、雨水が築地塀内側に停滞せずに西側の深い沢に流れ下るよう、調査区西部の岩盤を深く掘り込んでいる。こうした丘陵上から沢への排水用の溝は、丘陵上の築地塀内側に広く設置されたとみられる。なお、今回の調査区西側にある深い沢では、築地塀内側から外側への排水が必要になる。同様の沢状の地形を築地塀が横断する場所は外郭北辺で6カ所ある。このような場所の築地塀では、多賀城跡第20・40次調査区の外郭南辺築地塀下や、秋田城跡第19次調査区外郭西辺築地塀下で発見されたように、木樋を伴う可能性が高い。今回の対象地では木樋は発見されなかつたが、今後は、こうした場所での築地塀と排水施設の在り方について検討してゆく必要があろう。

### 築地塀の変遷について

今回の調査により、SF390 北辺築地塀は、構築後、第Ⅱ期以前に大規模な改修を受け、第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけても部分的な補修が加えられるなど、北辺の外郭施設として長期間維持されたことがわかつた。築地塀の崩壊時期や崩壊状況は場所によって異なり、それらの改修や補修の頻度・工法も場所によって異なっていたと考えられるが、SF390c 築地塀基底部の部分的な補修痕跡は、第51次調査の SF380B 東辺築地塀改修部分や、第73次調査の SF202b 南辺築地塀補修部分と、工法や積み土の特徴がきわめて類似している。これらの補修は、いずれも政府遺構期の第皿期以降、火山灰降下以前の第Ⅳ期に位置付けられ、第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけて、外郭築地塀の複数箇所で類似した手法の補修が施工された可能性が考えられる。こうした例からみると、多賀城の外郭施設は、構築後は一元的に維持管理されたものと考えられる。

### 引用文献

- 宮城県多賀城跡調査研究所 1973 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972』(第17次調査)
- 秋田市秋田城跡調査事務所 1977 『秋田城跡－昭和51年度秋田城跡調査概報一』(第19次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1980 『多賀城跡 政府跡 図録編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政府跡 本文編』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1983 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1892』(第40次調査)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1987 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1986』(第49・51次調査)
- 秋田県払田櫛跡調査事務所 1999 『払田櫛跡且一区画施設一』秋田県文化財調査報告書第289集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2003 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2002』(第73次調査)

## IV. 付章

### 1. 多賀城跡発掘調査事業第7次5カ年計画の総括

多賀城跡発掘調査の第7次5カ年計画は、平成11年度を初年度とし、本年度が計画終了年度にあることから、ここで、第7次5カ年計画とその実施状況の総括をしておきたい。

#### 第7次5カ年計画の目的

第7次5カ年計画は、多賀城政庁南門跡から外郭南門跡にかけての地域(「政庁—南門間」と略称する)を調査対象として平成10年度に表4の如く立案された。その目的は、①政府の東南前面に位置する城前地区的官衙の構造・変遷・性格の解明、②外郭南門から東西にのびる築地跡の追加調査と城内南北大路の検出、③城外における南北大路とその周辺の状況の把握、の3点にまとめられる。

#### 第7次5カ年計画の実施状況と変更

平成11年度から今年度までの発掘調査実施状況は表5の通りである。調査自体は概ね計画通りに推移したが、予算縮減等により多賀市の土地公有化事業に遅れが生じていてため、平成15年度は調査予定地を変更し、六月坂地区の外郭北辺部を対象とした調査を実施した。この変更については平成14年度9月10日第38回多賀城跡調査研究指導委員会に諮り了承を得たものである。

年 次	発掘調査次数(対象地区)	調査面積	予算(千円)
平成11年度	第70次調査(城前地区南部)	2,000 m <sup>2</sup>	41,000
平成12年度	第71次調査(城前地区南部)	2,000 m <sup>2</sup>	41,000
平成13年度	第72次調査(南門西築地跡・城内南北大路跡)	1,800 m <sup>2</sup>	41,000
平成14年度	第73次調査(南門東築地跡・城内南北大路跡)	1,500 m <sup>2</sup>	41,000
平成15年度	第74次調査(城外南北路跡とその東側の状況)	1,540 m <sup>2</sup>	41,000
合計	5地区	8,840 m <sup>2</sup>	205,000

表4 多賀城跡発掘調査事業第7次5カ年計画(平成10年11月17日)

年 次	発掘調査次数(対象地区)	調査面積	予算(千円)
平成11年度	第70次調査(城前地区南部)	2,000 m <sup>2</sup>	37,700
平成12年度	第71次調査(城前地区南部)	2,000 m <sup>2</sup>	32,300
平成13年度	第72次調査(南門西築地跡・城内南北大路跡)	1,000 m <sup>2</sup>	28,900
平成14年度	第73次調査(南門東築地跡・城内南北大路跡) 第74次調査(政庁—南門間道路跡)	1,800 m <sup>2</sup>	26,000
平成15年度	第74次調査(政庁—南門間道路跡) 第75次調査(外郭北門跡の状況)	1,500 m <sup>2</sup>	25,220
合計	6地区	8,300 m <sup>2</sup>	150,120

表5 多賀城跡発掘調査事業 第7次5カ年計画の実績

## 第7次5カ年計画の成果

### ① 政府東南前面にある城前地区の官衙の構造・変遷・性格の解明

第69次、第70次、第71次の3次にわたる調査の結果、政府の東南前面に位置する城前地区で官衙ブロックを検出し、構造と変遷を明らかにした。このうち、政府遺構期第II期の官衙ブロックは政庁地区以外では初めての例であり、重要な発見である。一方、この地区は第44次調査で出土した多賀城創建期後年の郷里制や兵士関係の木簡の供給源と推定され、鎮守府との関連で注目された経緯があるが、当該時期の確実な官衙施設は発見されず、木簡との関係は明らかにできなかった。なお、調査対象地の東西両側辺に未買収地があるため、これらの公有地化と調査が今後の課題として残る。

### ② 外郭南門から東西にびる築地塀跡の追加調査と城内南北大路の検出

第72次、第73次調査の結果、外郭南門の東西両側の築地塀を調査し、変遷を再確認するとともに、外郭南門内外で広場を発見した。ただし、南北大路と外郭南門、広場との関係は削平のため不明であった。一方、第74次調査では、南北大路想定路線上で八脚門と考えられる遺構を発見した。多賀城の構造を考える上で極めて重要な遺構とみられるが、所属時期や区画施設の有無など検討すべき課題が多い。これらの課題については、第74次調査区北側隣接地が未買収地であるため、公有地化が完了するのを待って調査を実施し、検討したい。

### ③ 多賀城外における南北大路とその周辺の状況の把握、

調査予定地が未買収であり、調査に入ることができなかつた。公有地化が完了するのを待って調査を実施したい。

以上のように、第7次5カ年計画の当初の目的は概ね達成されており、城前地区や南北大路の調査では多賀城を理解する上で重要な成果も得られている。ただし、城前地区の東西辺や、第74次調査区北側隣接地、外郭南門南側、などの未買収地は、公有地化の遅れに伴い、未調査区として残っている。これら未調査区の調査は公有地化の完了を待って、第8次5カ年計画以降に盛り込んでいくこととなった。

## 2. 関連研究・普及活動

平成15年度は多賀城跡発掘調査の他に、次の調査研究事業や普及活動を行った。

### (1) 多賀城跡環境整備事業

平成15年度は第7次5カ年計画の4年目にあたり、総事業費9,020千円(国庫補助50%)で柏木遺跡の保存整備工事を実施した。詳細は下記の通りである。

#### ① 法面保護工:植栽工として行う遺構表示の周辺を中心に芝張りを行った。

② 園路工:昨年度工事で設置した園路と敷地境界間(乗り入れ部)の整備を行った。なお園路はカラー樹脂舗装としているが、この乗り入れ部のみベイプ舗装としている。また車の乗り入れを制限するため、バリカー・車止めを設置した。さらに昨年度までに設置した擁壁と敷地境界との間をコンクリート舗装した。

③ 植栽工=遺構表示としてリュウノヒゲの植栽を密度100鉢/m<sup>2</sup>で行った。また土砂流出を防ぐため、遺構表示部はごろた石で縁取りした。さらに遺構表示部周辺にはエゴノキ、クヌギ等を植

栽した。

- ④ 照明設置工=防犯のための照明を設置した。なお本年度は機器の設置のみとし、通線工事は平成 16 年度を予定している。

## (2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

当研究所では、特別史跡内の遺構と歴史的景観の保護に努めている。しかしやむなく特別史跡内の現状を変更するにあたっては、申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡への影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を行っている。平成 15 年度における現状変更申請は 11 件あった(表 6)。

番号	申請者	変更箇所	変更事項	申請	基教委許可	対応
1	あやめまつり実行委員会委員長 多賀城市長 路木 和夫	多賀城市市川字田畠場地内	あやめまつり	平成 15 年 3 月 26 日	宗教委指令第 35 号 平成 15 年 4 月 30 日	立会・指導
2	多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市市川字田畠場地内	トイレ設置工事	平成 15 年 4 月 16 日	宗教委指令第 43 号 平成 15 年 5 月 14 日	指導
3	佐藤 勝	多賀城市市川字下坂下 38	物置建替	平成 15 年 4 月 16 日	委嘱第 4 の 222 号 平成 15 年 7 月 24 日	立会・指導
4	菊池 一夫	多賀城市市川字金屋 1	擁壁緊急工事	平成 15 年 6 月 6 日	宗教委指令第 180 号 平成 15 年 6 月 26 日	立会・指導
5	多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市市川字五万崎 66-1・2	廻土の一時的留保	平成 15 年 6 月 11 日	宗教委指令第 101 号 平成 15 年 6 月 26 日	立会・指導
6	東北電力株式会社塙巣営業所 所長 清津 嘉雄	多賀城市市川字城前地内	電柱取り替え工事	平成 15 年 7 月 28 日	宗教委指令第 159 号 平成 15 年 8 月 14 日	立会・指導
7	史跡多賀城万葉まつり実行委員 会委員長 堀尾 実昭	多賀城市高岡 1 丁目 74-2,78-1, 87-3,90-1,63-2	万葉まつり	平成 15 年 7 月 31 日	宗教委指令第 160 号 平成 15 年 8 月 14 日	立会・指導
8	多賀城市長 鈴木 和夫	多賀城市市川字立石地内	あやめ園記念整備	平成 15 年 9 月 8 日	宗教委指令第 207 号 平成 15 年 10 月 7 日	立会・指導
9	草刈建設株式会社 代表取締役 草刈 利夫	多賀城市市川字五万崎 4-9	仮設事務所設置	平成 15 年 9 月 16 日	委嘱財第 4 の 943 号 平成 15 年 11 月 7 日	立会・指導
10	佐藤 正春	多賀城市浮島字後山 30 番地	立木伐採	平成 15 年 9 月 19 日		立会・指導
11	小幡 広	多賀城市浮島字尻原 15 番 1	擁壁緊急工事	平成 15 年 10 月 27 日	市委指令第 88 号 平成 15 年 12 月 11 日	立会・指導

表 6 平成 15 年度実施の現状変更一覧

その内容は次のとおりである。

- ①民間工事 5 件—住宅改築工事(3)、擁壁工事(4、11)、仮設事務所設置(9)、立木伐採(10)。  
②公共事業 1 件—電柱工事(6)。  
③史跡の活用に関わるもの 5 件—催事行為(1、7)、公園施設修繕等(2、5、8)。

これら現状変更が軽微なもの 11 件については工事の際に立ち会い調査を行っている。

## (3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所では古代多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について、計画的な調査と研究を継続的に行っている。この調査と研究事業は、中央政府が陸奥と出羽両国を支配する上で中心としての役割を果たした古代の多賀城を、多角的な視野から解明することを目的としている。

平成 15 年度は第 6 次 5 カ年計画の 5 年度にあたり、桃生郡鳴瀬町に位置する亀岡遺跡の第 2 次調査を実施した。発掘調査面積は約 830 m<sup>2</sup>である。調査は鳴瀬町教育委員会と共に実施している。総事業費は 6,300 千円(50%国庫補助)である。調査の内容は次のとおりである。

遺跡内に 4 力所の調査区を設け、発掘調査を約 830 m<sup>2</sup>実施した。その結果、多賀城創建期の瓦がまとまって出土する野蒜小学校体育館の北西(A 区)で、カマド壁材に瓦を転用した 8 世紀前葉から中葉頃の住居跡 1 棟と古墳時代中期後半の住居跡 2 棟、古代の貝層を発見した。現在遺物が最も多く散布する西の畑(F、G、H 区)では古墳時代後期から古代の貝層を伴う集落を検出している。

2 次にわたる調査で、遺跡は古代の海岸に立地し、遺跡の西側で古墳時代後期から古代の貝層を伴

う集落が営まれ、東側の一角（現小学校体育館周辺）で多賀城創建期の瓦がまとまって出土することがわかった。この瓦が出土する地に設けた調査区では、転用目的に瓦を持ち込んだ住居跡を発見し、波力などで瓦が流れ込む堆積状況を掴んだ。また瓦の摩滅が顕著でないことから、比較的周囲に本来瓦を利用した施設があったと考えられる。今後、遺跡の内容を解明する有力な手がかりが得られた段階で、再度調査を行うことが必要と考えている。

#### （4）遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査によって検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は福岡県福岡市鴻臚館跡、太宰府市太宰府跡、大野城跡、久留米市高良山神護石、前原市雷山神籠石、額田町鹿毛馬神籠石、佐賀県基山町基葬城跡、唐津市菜畑遺跡、鎮西町名護屋城跡、三田川町吉野ヶ里遺跡、熊本県菊鹿町鞠智城跡、大阪府狹山市狹山池跡、宮城県亘理町三十三堂遺跡、仙台市郡山遺跡、古川市名生館遺跡、田尻町新田柵推定地、色麻町一の関遺跡、日の出山窯跡、土器坂窯跡、高根窯跡、官林窯跡、岩手県盛岡市志波城跡、秋田県秋田市秋田城跡、仙北町払田柵跡等の調査データを収集した。さらに従来収集した各地のデータを整理し比較と検討を行った。

#### （5）その他

##### 1. 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するために、下記の現地説明会を開催した。

加藤道男・佐藤則之・古川一明	「多賀城跡第74次調査について」	平成15年7月12日
加藤道男・佐藤則之・古川一明	「多賀城跡第75次調査について」	平成15年11月8日
阿部恵・吾妻俊典	「亀岡遺跡第2次調査について」	平成15年10月31日

##### 2. 各機関・委員会などへの協力

加藤道男 胆沢城跡整備指導會議委員 秋田市秋田城跡環境整備指導委員 扉田柵跡保存管理計画策定指導委員 盛岡市志波城跡整備委員 仙台市郡山遺跡発掘調査指導委員 多賀城市環境審議委員 古川市名生館官衙遺跡発掘調査・環境整備指導委員角田市郡山遺跡発掘調査指導委員 古代城柵官衙遺跡検討会代表世話人

佐藤則之 文化庁「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究」に関する協力者会議協力者  
古川一明 高清水町史編さん委員  
吾妻俊典 女川町文化財保護委員

##### 3. 発掘調査・講演会などへの協力

加藤道男 「特別史跡多賀城跡の歴史的意義」平成15年度小中高等学校及び特殊教育諸学校初任者研修  
平成15年8月6日

佐藤則之「中世の多賀城」平成 15 年度第 13 回史跡案内ボランティア養成講座平成	15 年 11 月 5 日
—— 亘理町三十三間堂遺跡発掘調査協力	平成 15 年 9 月 16 日～10 月 31 日
佐藤則之・古川一明・吾妻俊典 田尻町新田柵跡発掘調査協力	平成 15 年 5 月 8 日～8 月 2 日
吾妻俊典「特別史跡多賀城跡について」小牛田町立中塙小学校 PTA 研修	平成 15 年 6 月 22 日
——「平城京造営」河北地区教育員会文化財セミナー	平成 16 年 2 月 14 日
——「奈良時代の政治」河北地区教育員会文化財セミナー	平成 16 年 2 月 21 日
——「東北の城柵と人々の生活」河北地区教育員会文化財セミナー	平成 16 年 3 月 6 日
——「亘理、岩沼、名取の史跡巡り」河北地区教育員会文化財セミナー移動講座	平成 16 年 3 月 7 日

#### 4. 研究発表・執筆など

古川一明「多賀城跡第 74・75 次調査の概要」平成 15 年度宮城県遺跡調査成果発表会 仙台市博物館	平成 15 年 12 月 20 日
——「多賀城跡第 74175 次次調査の概要」第 30 回古代城柵官衙遺跡検討会 東北歴史博物館	平成 15 年 2 月 8 日
吾妻俊典「城柵の外郭—多賀城跡から—」宮城県考古学第 5 回会大会報告	平成 15 年 5 月 18 日
——「陸奥南部におけるカマド出現期の土器」『宮城考古学』第 5 号	平成 15 年 5 月 18 日
——「2002 年の考古学界の動向古代(東北)」『月刊考古学ジャーナル』5 月臨時増刊号 No. 502	平成 15 年 5 月 30 日
吾妻・阿部「亀岡遺跡第 1・2 次調査の概要」第 30 回古代城柵官衙遺跡検討会 東北歴史博物館	平成 16 年 2 月 28 日
吾妻(共著)『覚満寺遺跡発掘調査報告書—宮城県北部における中世墓域の調査—』覚満寺遺跡調査会	平成 16 年 3 月 31 日

#### 5. 連携大学院

東北大大学院文学研究科長と宮城県多賀城跡調査研究所長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。	
加藤道男(客員教授)	文化財科学研究演習 I 「史跡の保存整備と活用（1）」
	文化財科学研究演習 II 「史跡の保存整備と活用（2）」
	課題研究
佐藤則之(客員助教授)	文化財科学研究実習 II 「発掘調査の実際」
	課題研究

### 3. 組織と職員

(宮城県教育委員会行政組織規則(抄))

第13条の四 文化財保護課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関する事。

第21条 特別史跡多賀城跡附寺跡(これに関連する遺跡を含む。以下同じ。)の発掘、調査  
及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
宮城県多賀城跡調査研究所	多 賀 城 市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

- 一 特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘に関する事。
- 二 特別史跡多賀城跡附寺跡の出土品の調査及び研究に関する事。
- 三 特別史跡多賀城跡附寺跡の環境整備に関する事。
- 四 庶務に関する事。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもつて充てる。

#### 《職員》

所 長 副参事兼次長(總括・総務部長)  
加藤 道男 石山 順雄  
【博物館業務】

#### 《研究班》

主任研究員(班長) 阿部 恵  
主任研究員 佐藤 則之  
副主任研究員 佐藤 和彦 【博物館業務】  
副主任研究員 古川 一明  
研究員 吾妻 俊典  
技師 関口 重樹

#### 《総務班》

主任主査 西條 久代 【博物館業務】  
主事 中嶋 典嗣 【博物館業務】

## 4. 沿革と実績

### (1) 宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年 月	事 項
大正 11. 10 昭和 35	多賀城跡が史蹟名勝天然記念物保存法(大正 8・4 公布)により史跡指定、指定名称「多賀城跡附寺跡」 県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織して 5ヶ年計画で多賀城跡の発掘調査を実施することになり、その初年度事業として多賀城跡と多賀城廢寺跡の地形図を作成
36. 8	多賀城废寺跡第 1 次発掘調査実施(県教委主体。多賀城町と河北文化事業団体共催。調査団体は伊東信雄東北大学教授)
37. 8	多賀城废寺跡第 2 次発掘調査実施、主要伽藍配置が判明
38. 8	多賀城跡政府地区 発掘調査(第 1 次)開始、以後 40 年 8 月(第 3 次)まで実施、政府地区の朝堂院的な建物配置が判明
41. 4	多賀城跡附寺跡特別史跡に昇格指定
45. 11	多賀城町が多賀城跡政府地区の発掘調査(第 4 次)を再開
44. 4	宮城県 多賀城跡調査研究所設立
44. 7	多賀城跡調査研究指導委員会設置(委員長伊東信雄) 研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44. 1	色麻村日の出山窯跡の発掘調査実施
45. 3	『多賀城跡調査報告 1 - 多賀城废寺跡 -』刊行
45. 4	研究所による多賀城跡環境整備事業開始
48. 1	金船地区を対象とした第 21 次調査で計帳様文書断簡を発見
49. 2	外郭西辺地区的追加指定が官報告示
49. 4	多賀城闇連遺跡発掘調査事業開始
49. 8	桃生城跡の発掘調査に着手(昭和 50 年まで継続)
49. 8	プレハブ施舎から東北歴史資料館の建物に移転
51. 3	特別史跡多賀城跡保存管理計画書策定
52. 7	伊治城跡の発掘調査に着手(昭和 54 年まで継続)
53. 4	研究第一科・同第二科制となる、遺構調査研究事業開始
53. 6	漆紙文書の発見を報道発表、これにより研究所が山本壯一郎知事から表彰を受ける
55. 3	『多賀城跡 - 政府跡園鏡編 -』刊行
55. 3	館前遺跡の追加指定が官報告示
55. 7	名生館遺跡の発掘調査に着手(昭和 50 年まで継続)、初年度の調査で 8 世紀初頭の官衙中枢部を検出 現状変更に伴う緊急調査(第 40 回)により外郭線南辺築地中央部で木棟発見
57. 1	『多賀城跡 - 政府跡本文編 -』刊行
57. 3	第 43・44 回調査で政府南前面の道路遺構発見
58. 11	多賀城跡南面地域の追加指定が官報告示
59. 3	名生館遺跡闇連合戦原瓦窯跡発掘調査実施
61. 8	東山遺跡の発掘調査に着手(平成 4 年度まで継続)
62. 8	名生館官衙遺跡の史跡指定が官報告示
62. 11	第 53 回調査で多賀城第 I・II 期の外郭東門を発見
63. 3	特別史跡多賀城跡附寺跡第 2 次保存管理計画書策定
平成 2. 6	柏木遺跡の追加指定が官報告示
2. 11	多賀城跡調査研究指導委員会に南門・政府間整備活用専門部会を設置
4. 11	日本最古の「かな」漆紙文書について報道発表
5. 8	下伊塙野窯跡群の調査を実施し、3 基の多賀城創建瓦窯跡を発見
5. 9	山王千刈田地区的追加指定が官報告知
6. 8	桃生城跡の発掘調査を再開(平成 13 年度まで継続)、政府の全貌を解明
7. 6	第 31 回指導委員会において南門・政府間整備活用計画案承認
9. 11	多賀城碑覆屋の解体修理および碑地下部分の発掘調査を実施
10. 6	多賀城碑の重要文化財(古文書)指定が官報告示
11. 1	東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
11. 4	2 科制が廃され、研究班となる
11. 4	東北歴史博物館の建物に移転
14. 1	「多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の解明に尽くした功績」により第 51 回河北文化賞を受賞 亀岡遺跡の発掘調査に着手(平成 15 年度まで継続)
14. 8	『多賀城跡 - 発掘のあゆみ -』刊行
15. 3	多賀城跡の史跡指定が官報告示
15. 6	伊治城跡の史跡指定が官報告示

## (2) 事業実績

### 1) 多賀城跡発掘調査の実績

計 画 年 度	年 度	次 数	発 掘 調 査 地 区	早 報 面 積 (m <sup>2</sup> )	經 費 (千円)	計 画 面 積 (m <sup>2</sup> )	年 度	次 数	発 掘 調 査 地 区	早 報 面 積 (m <sup>2</sup> )	經 費 (千 円)
第一 次 計 画 年 度	昭和41	5次	政令地内南東部	1,980			第 4 次 計 画 年 度	45次	坂下地区	70	
		6次	政令地内北東部	2,679	9,000			46次	外堀周辺地区	750	29,000
		7次	外部城内中央部 (多賀城跡公園)	264				47次	外堀西の中央部	1,000	
	昭和45	8次	外部城内中央部	350				48次	外堀東周辺	800	
		9次	政令地内南東部	2,046		12,000		49次	外堀北周辺地区	450	
		10次	外部城内中央部	495				50次	政令地内	900	29,000
		11次	外部城内南東部	600				51次	外部北周辺地区	100	
	昭和46	12次	外部城内北東部	3,795				52次	人頭塚(及び庭園)の地区	500	
		13次	外部城内北東部	1,600	12,000			53次	外堀周辺北東部	1,000	
		14次	外部城内北東部	2,086				54次	外堀周辺北周辺	1,000	29,000
	昭和47	15次	外部城内	112				55次	外堀東の中央部 (消費地)	500	
		16次	政令地内北半部	1,320		13,000		56次	人頭塚(北半部)	1,500	
		17次	外部北東隅・北西隅	1,729				57次	外堀北周辺 (西側)	500	
		18次	外部城内北東部	2,907				58次	人頭塚(中央部)	1,470	
	昭和48	19次	政令地内北西部	2,640				59次	人頭塚(中央部)	900	
		20次	外部城内中央部	900		17,000		60次	人頭塚(北東部)	1,420	
		21次	外部城内北東部	1,485				61次	湯ノ池地区	150	
		22次	城内南方 (高平遺跡)	3,465				62次	人頭塚(北半部)	1,100	
第二 次 計 画 年 度	昭和49	23次	外部城内北東部 (守子城)	3,300		17,000		63次	人頭塚(北半部)	1,700	
		24次	外部城内東隅	2,640				64次	人頭塚(北端)	3,000	35,000
	昭和50	25次	多賀城跡(崎南)伊豫原地	2,310				65次	外堀周辺北端	1,600	
		26次	多賀城跡(崎南)伊豫原地	2,310	22,000			66次	現代変遷(洋う園庭)	400	
		27次	御山宮西陣相川久保塚	660				67次	人頭塚(北西部)	3,000	35,000
	昭和51	28次	五石城跡	2,330		22,000		68次	人頭塚(西)	3,000	39,000
		29次	五石城跡	2,330				69次	人頭塚(西)	2,650	36,000
	昭和52	30次	五石城跡	1,980		22,000		70次	城内周辺	2,000	36,000
		31次	政令北方隣接地	1,980				71次	城内周辺	2,000	37,700
	昭和53	32次	政令北方隣接地	1,000		22,000		72次	城内周辺	2,000	32,300
		33次	外部西門周辺	1,000				73次	南門西側周辺	1,000	26,000
第三 次 計 画 年 度	昭和54	34次	南門地区(城址地)	1,300				74次	南門一帯(西側)	1,800	26,000
		35次	湯ノ池地区	900	30,000			75次	南門北側周辺	1,000	25,200
	昭和55	36次	外部城跡(中央部)周辺	1,000		30,000		76次	南門北側周辺	1,000	
		37次	多賀城跡(外側方)(佐原川南側)	700				77次	南門北側周辺	100	
	昭和56	38次	作費畠の堤防(笠置山頭)	50				78次	南門北側周辺	1,000	
		39次	外部城跡(中央部)作費畠	2,700	35,000			79次	南門北側周辺	1,000	
		40次	外部城跡(中央部)中城(立石塚・堅忍)	80				80次	南門北側周辺	100	
	昭和57	41次	外部城跡(中央部) (南門南側)	1,200		32,000		81次	南門北側周辺	1,000	
		42次	外部城跡(中央部) (作費畠)	500				82次	南門北側周辺	100	
	昭和58	43次	外部中央部(中央部) (南門南側)	800		32,000		83次	外部中央部(中央部) (南門南側)	2,500	
		44次	外部中央部(中央部) (南門南側)	2,500				84次	外部中央部(中央部) (南門南側)	2,500	

2) 多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

	年 度	対 象 地 区	主 な 工 事 内 容	面積(㎡)	事業費(千円)
第1次 5カ年計画	昭和45	政宁地区(第1期)	南門翼廊路・東駆除跡表示工	3,519	10,000
	昭和46	政宁地区(第2期)	正殿跡・築地跡表示工	7,256	20,000
	昭和47	政宁地区(第3期)	西駆除跡・築地跡表示工	14,669	25,000
	昭和48	政宁地区(第4期) 外郭地带地区	北西門跡・築穴跡表示工	9,415	20,000
	昭和49	六月坂地区	掘立建物跡・倉庫跡・道路跡表示工	8,326	20,000
第2次 5カ年計画	昭和50	外郭地带地区(第1期)	木質遺構保存施設設置工	3,600	20,000
	昭和51	外郭地带地区(第2期)	湿地修景工・園路工	6,400	10,000
	昭和52	鴻の池地区(第1期)	南邊築地跡表示工	2,000	16,000
	昭和53	鴻の池地区(第2期) 南門地区(第1期)	多賀城跡周辺修景工 南門跡・築地跡保護工	2,500	16,000
	昭和54	南門地区(第2期)	南門周辺丘陵の地形修復工・緑化修景工	5,200	20,000
第3次 5カ年計画	昭和55	南門地区(第3期)	園路工・便益施設工・緑化修景工	7,030	30,000
	昭和56	外郭南築地東半部	緑化修景工	2,149	30,000
	昭和57	園路(資料館-南門) 外郭南門地区東斜面	園路工	31,831	28,000
	昭和58	作賀地区(第1期)	遺構保護盛土工・緑化修景工	54,400	30,000
	昭和59	作賀地区(第2期)	建物跡表示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	6,750	27,000
第4次 5カ年計画	昭和60	作賀地区(第4期)	遺構露出展示工・便益施設工・園路工・緑化修景工	6,400	27,000
	昭和61	政府南地区 作賀地区 雀山地区	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工 便益施設工 緑化修景工	7,470	27,000
	昭和62	作賀地区北部 政府地区 雀山地区	地形修復工・園路工・緑化修景工 便益施設工・園路工・緑化修景工 便益施設工・園路工・緑化修景工	6,130	27,000
	昭和63	作賀地区北部・丘陵南側部	便益施設工・園路工・緑化修景工	8,260	27,000
	平成元	北辺地区南半部	便益施設工・園路工・緑化修景工	6,700	27,112
第5次 5カ年計画	平成2	北辺地区北半部(第1期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	11,500	30,000
	平成3	北辺地区北半部(第2期)	便益施設工・園路工・緑化修景工	19,000	30,000
	平成4	北辺地区北半部(第3期) 東門・大御門地区東側部(第1期)	便益施設工 地形修復工・園路工・緑化修景工	2,900	30,000
	平成5	東門・大御門地区東側部(第2期)	奈良時代門跡及びJIS建立建物跡表示工・便益施設工	2,500	35,000
	平成6	東門・大御門地区東側部(第3期)	便益施設工	550	35,000
第6次 5カ年計画	平成7	東門・大御門地区西側北半部(第1期)	道路跡復元工・築地跡復元工・便益施設工・緑化修景工	3,120	30,000
	平成8	東門・大御門地区西側北半部(第2期)	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	14,250	39,000
	平成9	東門・大御門地区西側北半部(第3期) 南門地区	道路跡表示工・便益施設工 多賀城跡碑櫻剥削修理工	805	51,000
	平成10	東門・大御門地区西側北半部(第4期)	道路跡表示工・排水施設工・緑化修景工	12,500	35,000
	平成11	東門・大御門地区西側北半部(第5期)	建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工		31,500
第7次 5カ年計画	平成12	柏木遺跡(第1期)	遺構保護造成工・排水工・法面保護工		14,400
	平成13	柏木遺跡(第2期)	方面保護工・園路施設工・植栽工・排水工	3,800	19,700
	平成14	柏木遺跡(第3期)	遺構表示工・園路工		9,300
	平成15	柏木遺跡(第4期)	法面保護工・遺構表示工・園路工・植栽工・照明設置工		9,020

### 3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年 度	遺 跡 名	事 業	内 容	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	経費 (千円)
第1次 5カ年 計画	昭和49	桃生城跡	地形図作成 第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2,500
	昭和50	桃生城跡	第2次発掘調査	同 上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次 5カ年 計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同 上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	地形図作成 第1次発掘調査	城内地図の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同 上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区的調査	1,156	7,000
	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区的調査	1,020	7,000
第3次 5カ年 計画	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地図の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡 合戦原窓跡	第6次発掘調査	範囲確認調査関連窓跡の調査	1,300	6,300
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
	昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中枢部の把握	1,200	7,000
第4次 5カ年 計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同 上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同 上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同 上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同 上	3,260	12,000
	平成5	下伊場野窓跡	地形図作成 発掘調査	多賀城創建期窓跡の調査	600	14,000
第5次 5カ年 計画	平成6	桃生城跡	地形図作成 第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成7	桃生城跡	第4次発掘調査	同 上	730	20,000
	平成8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成10	桃生城跡	第7次発掘調査	同 上	800	17,000
第6次 5カ年 計画	平成11	桃生城跡	第8次発掘調査	同 上	1,200	15,300
	平成12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	平成13	桃生城跡	第10次発掘調査	同 上	600	11,400
	平成14	亀岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
	平成15	亀岡遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	830	6,300

#### 4) 研究成果刊行物

##### ①宮城県多賀城跡調査研究所年報

『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1969』(第 5・6・7 次調査)	昭和 45 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1970』(第 7・8・9・10・11 次調査)	昭和 46 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1971』(第 12・13・14 次調査)	昭和 47 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972』(第 15・16・17・18 次調査)	昭和 48 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1973』(第 19・20・21・22 次調査)	昭和 49 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1974』(第 23・24 次調査)	昭和 50 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1975』(第 25・26・27 次調査、東外郭線南端部緊急発掘)	昭和 51 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1976』(第 28・29 次調査)	昭和 52 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1977』(第 30・31 次調査)	昭和 53 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1978』(第 32・33 次調査、環境整備)	昭和 54 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』(第 34・35 次調査、環境整備)	昭和 55 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1980』(第 36・37 次調査)	昭和 56 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1981』(第 38・39・40 次調査)	昭和 57 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1982』(第 41・42 次調査)	昭和 58 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1983』(第 43・44 次調査)	昭和 59 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984』(第 45・46・47 次調査、環境整備)	昭和 60 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1985』(第 46・48・49 次調査)	昭和 61 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1986』(第 49・50・51 次調査)	昭和 62 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1987』(第 50・52・53 次調査)	昭和 63 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1988』(第 53・54・55 次調査)	平成 元年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1989』(第 56・57 次調査)	平成 2 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1990』(第 58・59 次調査)	平成 3 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』(第 60・61 次調査)	平成 4 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992』(第 62・63 次調査)	平成 5 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1993』(第 64 次調査)	平成 6 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994』(第 65 次調査、環境整備)	平成 7 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1995』(第 66 次調査)	平成 8 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1996』(第 67 次調査)	平成 9 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』(第 68 次調査、多賀城碑覆層解体修理)	平成 10 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1998』(第 69 次調査)	平成 11 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1999』(第 70 次調査)	平成 12 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2000』(第 7 次調査、環境整備)	平成 13 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2001』(第 72 次調査)	平成 14 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2002』(第 73 次調査)	平成 15 年 3 月
『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2003』(第 74・75 次調査)	平成 16 年 3 月

##### ②多賀城関連遺跡発掘調査報告書

『桃生城跡 I』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 1 冊	昭和 50 年 3 月
『桃生城跡 II』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 2 冊	昭和 51 年 3 月
『桃生城跡 III』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 3 冊	昭和 53 年 3 月
『伊治城跡 II』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 4 冊	昭和 54 年 3 月
『伊治城跡 III』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 5 冊	昭和 55 年 3 月
『名生船道跡 I』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 6 冊	昭和 56 年 3 月
『名生船道跡 II』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 7 冊	昭和 57 年 3 月
『名生船道跡 III』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 8 冊	昭和 58 年 3 月
『名生船道跡 IV』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 9 冊	昭和 59 年 3 月
『名生船道跡 V』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 10 冊	昭和 60 年 3 月
『名生船道跡 VI』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 11 冊	昭和 61 年 3 月
『東山遺跡 I』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 12 冊	昭和 62 年 3 月
『東山遺跡 II』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 13 冊	昭和 63 年 3 月
『東山遺跡 III』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 14 冊	平成元年 3 月
『東山遺跡 IV』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 15 冊	平成 2 年 3 月
『東山遺跡 V』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 16 冊	平成 3 年 3 月
『東山遺跡 VI』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 17 冊	平成 4 年 3 月
『東山遺跡 VII』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 18 冊	平成 5 年 3 月
『下伊勢野宮跡』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 19 冊	平成 6 年 3 月
『桃生城跡 IV』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 20 冊	平成 7 年 3 月
『桃生城跡 V』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 21 冊	平成 8 年 3 月
『桃生城跡 VI』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 22 冊	平成 9 年 3 月
『桃生城跡 VII』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 23 冊	平成 10 年 3 月
『桃生城跡 VIII』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 24 冊	平成 11 年 3 月
『桃生城跡 IX』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 25 冊	平成 12 年 3 月
『桃生城跡 X』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 26 冊	平成 13 年 3 月
『龜岡遺跡 I』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 27 冊	平成 14 年 3 月
『龜岡遺跡 II』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 28 冊	平成 15 年 3 月

##### ③研究紀要

『研究紀要 I』	昭和 49 年 3 月
『研究紀要 II』	昭和 50 年 3 月
『研究紀要 III』	昭和 51 年 3 月
『研究紀要 IV』	昭和 52 年 3 月
『研究紀要 V』	昭和 53 年 3 月
『研究紀要 VI』	昭和 54 年 3 月
『研究紀要 VII』	昭和 55 年 3 月

##### ④調査報告書・資料集他

『多賀城と古代日本』	昭和 59 年 3 月
『多賀城と古代日本』	昭和 60 年 3 月
『多賀城紙文書』	昭和 54 年 3 月
『多賀城跡歴一図録編』	昭和 65 年 3 月
『多賀城跡政跡一本文編』	昭和 57 年 3 月
『多賀城と古代東北』	昭和 66 年 3 月
『多賀城跡発掘調査の歩み』	平成 15 年 3 月

# 写 真 図 版

## 写真図版 1

- 1 第74次調査区と政府  
(南より)  
[フィルム D23793]



- 2 第74次調査区と南門  
(北より)  
[フィルム D23794]



- 3 調査区全景  
(東より)  
[フィルム D23797]





4 第74次調査区全景  
〔フィルム D23788〕



5 SB2776 全景（南より）  
〔フィルム D23829〕

写真図版 3

6 SB2776 P4  
柱穴検出状況  
〔フィルム D23779〕



7 SB2776 P4  
柱穴断面（南東より）  
〔フィルム D23802〕

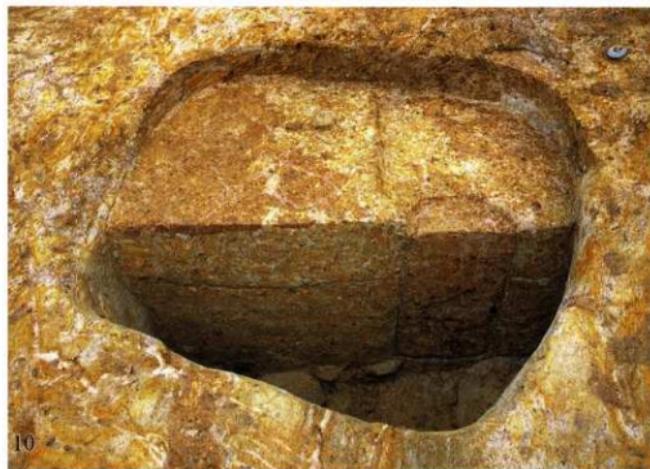


8 SB2776 P2  
柱穴断面（南より）  
〔フィルム D23837〕





9 SI2765 周辺  
(西より)  
[フィルム D23816]



10 SB2777 P3  
柱穴断面 (南より)  
[フィルム D23821]



11 SB2777 P2  
柱穴断面 (南より)  
[フィルム D23822]

写真図版 5

12 SA2772

柱列（南より）

〔フィルム D23834〕



12

13 SA2472 P1

柱穴（南西）

〔フィルム D23813〕



13

14 SA2772 P3

柱穴断面（南より）

〔フィルム D23823〕



14

15 SX2773 瓦組暗渠

(北東より)

[フィルム D23807]



16 SA2756 柱列・

SB2755 建物 (南より)

[フィルム D23835]



17 SX2773

瓦組暗渠 (南より)

[フィルム D23806]

写真図版 7

18 SK2754 断面（東より）  
[フィルム D23805]



19 SK2758 断面（西より）  
[フィルム D23827]



20 SI2478 全景（南より）  
[フィルム D23828]





21 SI2765 全景 (南より)  
[フィルム D23831]

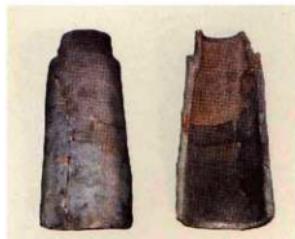


22 SI2765 カマド  
[フィルム D23832]

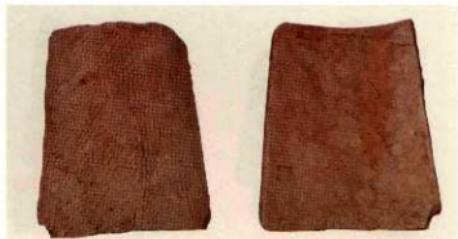


23 SI2766 全景 (南より)  
[フィルム D23833]

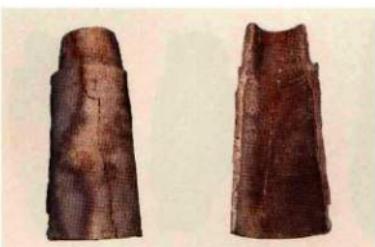
写真図版 9



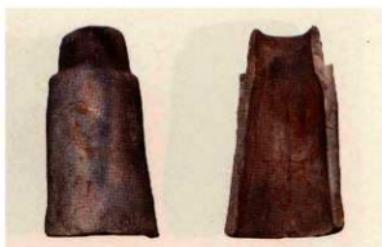
SI2765 出土丸瓦 II B 類 —SI2765-R1—



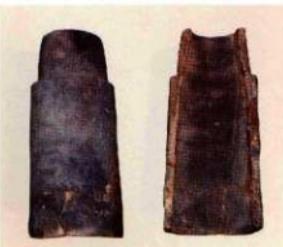
SI2765 出土平瓦 II B 類 b タイプ —SI2765-R4—



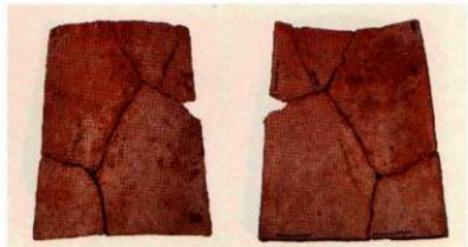
SI2766 出土丸瓦 II B 類 —SI2765-R11—



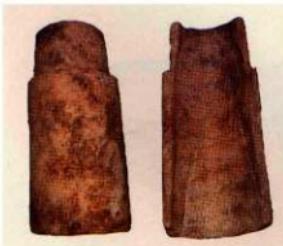
SI2766 出土丸瓦 II B 類 —SI2765-R2—



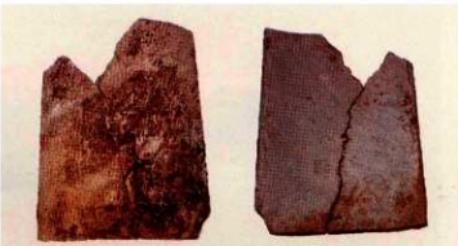
SI2766 出土丸瓦 II B 類 —SI2766-R13—



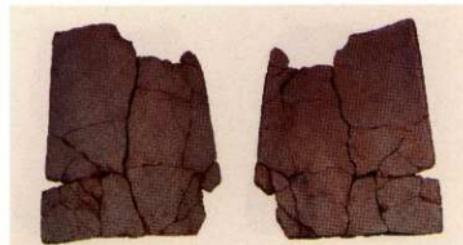
SI2766 出土平瓦 II B 類 b タイプ —SI2766-R1—



SI2766 出土丸瓦 II B 類 —SI2766-R15—



SI2766 出土平瓦 II B 類 b タイプ —SI2766-R6—



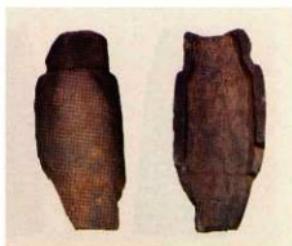
SK2486 出土平瓦 II B 類 b タイプ —SK2486-R1—



SK2754 出土軒丸瓦 —SK2754-R8—



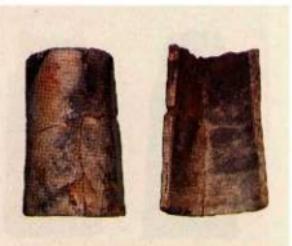
SK2486 出土平瓦 II B 類 b タイプ —SK2486-R2—



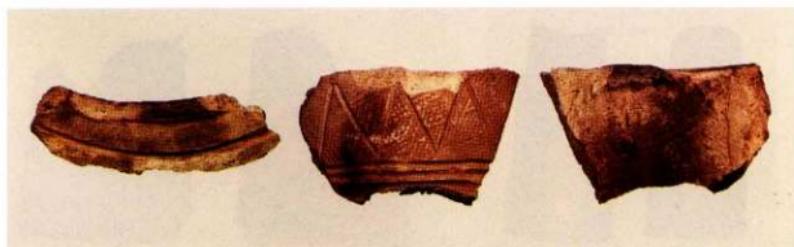
SK2759 出土丸瓦 II B 類 —SK2759-R1—



SK2769 出土平瓦 II B 類 b タイプ —SK2769-R22—



表土出土丸瓦 —表土-17—



表土出土二重弧紋軒瓦〔型番 511〕 —表土-R6—

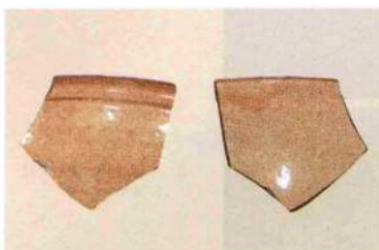
凹面刻書『新田』



表土出土刻書瓦凹面「玉造」 —表土-R39—



表土出土細弁蓮花文軒丸瓦[型番 311]  
—表土-R1—



SX2756 出土白磁碗 —SX2758-R3—



SX2770 出土青磁水注 —SX2770-R1—



SI2765 出土須恵器高坏・坏  
—SI2765-R12・R11—



SI2748 出土須恵器坏  
—SI2478-R1—



SI2762 出土須恵器蓋  
—SX2762-R2—



1 調査区の位置  
(南より)  
[フィルム D23850]



2 第 75 次調査区全景  
[フィルム D23841]



3 調査前の状況 (東より)  
[フィルム D23861]

写真図版 13

4 SF390 築地塀西部  
(南より)  
[フィルム D23916]



5 SF390 築地塀中央部  
(南より)  
[フィルム D23915]



6 SF390 築地塀東部  
(南より)  
[フィルム D23914]





7 岩盤を削り出した状況（北東より）

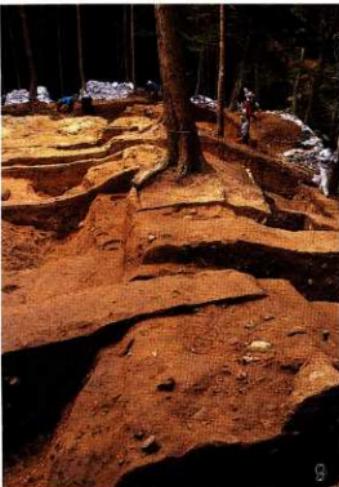
〔フィルム D23917〕



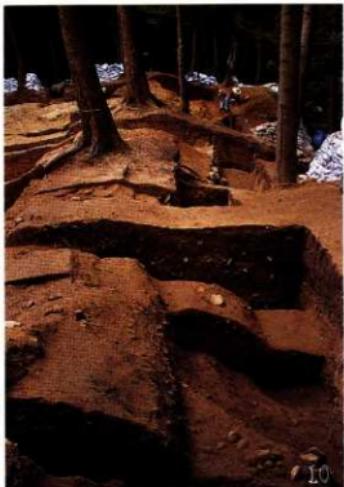
8 岩盤を削り出した状況（北より）

〔フィルム D23918〕

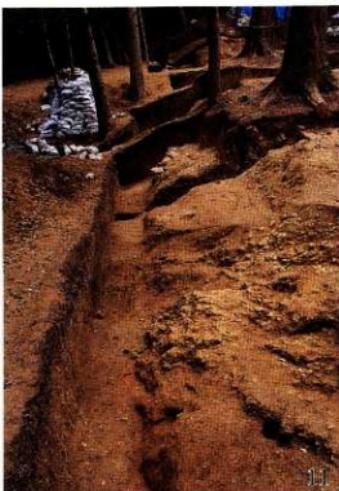
写真図版 15



9 SF390 築地塹  
(東より)  
[フィルム D23900]



10 SF390 築地塹  
北側 (東より)  
[フィルム D23899]



11 SF390 築地塹  
北側 (西より)  
[フィルム D23906]



12 SF390 築地塹  
(西より)  
[フィルム D23905]



13 SF390 築地塹と内構  
(西より)  
[フィルム D23904]



14 SF390b 築地塙  
(西から)  
[フィルム D23885]



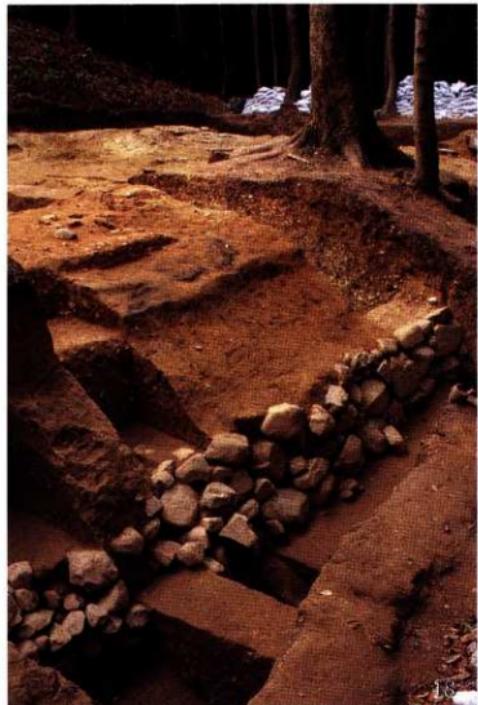
15 SF390a 築地塙 D-D' 断面  
(東から)  
[フィルム D23929]



16 SF390a・b 築地塙基壇  
断面 (西から)  
[フィルム D23939]

写真図版 17

17 SF390 築地塀側面  
(北より)  
[フィルム D23887]



18 SF390 築地塀 (北東より)

[フィルム D23888]



19 SF390 築地塀基壇石垣 (東より)

[フィルム D23893]



20

20 SF390b 築地壠南側大走  
炭化物層（南西から）  
〔フィルム D23920〕



21

21 SX390b 築地壠北側大走  
炭化物層（東から）  
〔フィルム D23934〕



22

22 築地南側堆積層断面②  
(西から)  
〔フィルム D23937〕



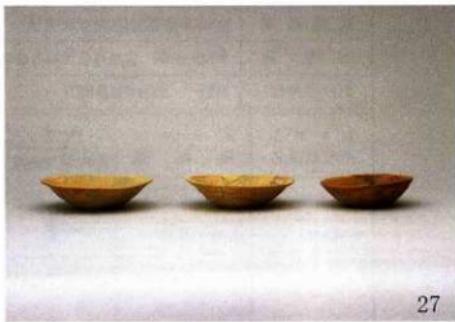
23



26



24



27



25

24 SD2791 須恵系土器 R1 出土状況  
[フィルム D23936]

25 SK2779・SX390 崩壊土出土土器  
[フィルム E1887A]



27 SD2791 出土土器 R1～3  
[フィルム E1888A]

28

28 SF390 崩壊土出土縁釉陶器碗

# 報告書抄録

ふりがな	みやびけんたがじょうあとちょうおせんきゆうしょねいばう 2003 たがじょうあと							
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2003 多賀城跡							
副書名	多賀城跡－第74・75次調査－							
卷次	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2003							
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報							
シリーズ番号	2003							
編著者名	佐藤則之・古川一明							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1丁目22-1 TEL 022(368)0102 FAX 022(368)0104							
発行年月日	西暦 2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	○○°	○○'			
特別史跡 たがじょうあと 多賀城跡	みやびけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いちかわ うきしま 市川・浮島	042099	004	38度 18分 14秒	140度 59分 30秒	2003.5.6 2003.11.14	1,500 m <sup>2</sup>	調査計画に基づく学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
特別史跡 多賀城跡 第74次調査	国府・ 城柵遺跡	奈良時代 ?	南門-政厅間道路 門跡 堀立式建物跡 竪穴式住居		土器師、須恵器、 須恵系土器 白磁、青磁、 軒丸瓦、軒平瓦、 丸瓦、平瓦、		多賀城政庁遺構期III・ IV期の政庁-南門間道路を検出し調査した。 さらに道路中央で、I期の門跡の可能性が高い柱穴5個を確認した。	
第75次調査			築地跡		土師期、須恵器、 須恵系土器		多賀城北辺中央部の築地跡を調査し、築地堀には3時期の変遷があり、10世紀中頃まで維持・管理されていることが明らかになった。 また最も古い時期の基礎地業には土留めの石垣が築かれていた。	

---

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2003  
多賀城跡

平成16年3月25日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所  
多賀城市高崎一丁目22-1  
TEL(022)368-0102  
FAX(022)368-0104  
印刷所 東杜印刷株式会社

---